

ごもく四し

大乗コツカ



著者近影

ご
も
く
め
し

はしがき

この十一月二十日をもって私も満七十七才となりました。憶えば永い人生行路でした。でも、私はまだまだ元気のもりで、精いっぱい張り切っておりますが、周囲の方々は喜寿ではあるし、学校の学長、校長として復帰したのだから、お祝いをしてやろうといって下さいます。私はまだ老境に入りたくないのです、八十八まではとお断りしましたが、衆議にはかなわず、ついにこの十一月三日、文化の日を期して学校の関係者だけの祝賀をおうけすることになりました。

これより先、旧知坂戸公顕氏に学校の創立者としてたしかな記録を残すために、伝記のようなものを書いておく必要を説かれ、折にふれていろいろの思い出を少しずつ纏めていきましたが、思いがけない喜寿の賀の話がもちあがりまして、この稿を土台として、こ

れをつくることにしました。

「ごもくめし」という題名のように御馳走として調ったものでもなく、鰻のような栄養もなく、といって「おにぎり」のように一つの型の揃ったものでもなく、甘いもの辛いもの酔っぱいもの、又赤や白や黄色、青と色とりどりのものを、形もなくごたごたに混ぜ合せたこのささやかな小冊は、私の毎日の仕事そのままの姿でもあると存じます。あのことも、あの方も、私の脳裏を往来する事柄はとてもとても、いっぱい整理のしようもございませんが、いまままで書いた中の一部をここに集めて、今日（十一月三日）皆さまにお届けしたいと急ぎました。お手すきに一頁でも御覧頂かれましたら私の満足これにすぎないものはありません。

終りに坂戸氏の年来のご厚意に対し、深く感謝の意を表します。

昭和三十六年十一月三日

大妻コタカ

目次

ふるさと	三
ダムで湖底に	五
二つある誕生日	六
熊田家のこと	二〇
私の結婚	三三
塾から学校まで	三三
宮家に御教授にあがる	三六
焦土から起ち上る	四〇
思いがけない夫の死	四六
大妻の先祖兼澄のこと	四六
大妻家のこと	四六
神仏への信仰	七〇

浅草寺のこと	七
京都靈山	七
へたの横好き	七
不思議なはなし	八
追放から解除まで	六
受章の光栄に	九
五十周年記念のこと	一〇
心残りのこと	一〇
宮廷関係のことなど	一〇
無言のうちの教訓	一一
講堂の火事	一八
忘れ得ぬ人たち(その一)	二三
忘れ得ぬ人たち(その二)	二三
忘れ得ぬ人たち(その三)	二四
郷里の母校	二四

二つの秘訣	二五
喜寿におもう	二五
ほめあいたい	二五
よい妻に	二六
この道三十年	二六
外地の思い出	二七
世界教育会議	二九
思い出を繰る	二九

ふるさと

私は、明治十七年に広島県世羅郡三川（みかわ）村（現在の甲山町）久恵（くえ）に生まれまして。一口に広島というにはいささか広く、騒音はなばなししい市内とは、まったく趣を異にした。文字通り閑静な山の中で「酒屋へ三里、豆腐屋へ二里」山坂越えて一里近くもゆかねば人通りのある里道へは出られない、町とは名のみの辺鄙なところでは。今なお、ものさびしい田舎のことですから、まして六、七十年も昔の私の子供の頃は推して知るべしです。

甲山町久恵は、山陽本線福山駅から福塩線に乗り換えて、広島県を流れる芦田川の岸を上流に向かって約二時間の所にあります。この沿線の景色は誠にすばらしいものです。いくつもの小さなトンネルをくぐり、春は桜、秋は紅葉の山々や谷間を縫うように走りながら藁ぶきの家々が散在するこののどかな風景を楽しむのがとても好きで、ここの景色を眺めるたびに、どんな疲れもわすれてしまうほど気持がやすまるのです。

久恵への下車駅は、備後三川と申しますが、この駅は今から約十年前に設置されたものでそれ以前は八里（三十二キロ）もの延々と続く長い道のりを、尾道市から人力車にゆられながら久恵に向かったものでした。でも、今ではダムや近くの矢野温泉などのおかげで、バスも通り始め、日々多くの人々が入り出すようになって、道路も新しくなってきましたが、私のふるさとへの愛着は、やはり昔ながらの小さな久恵部落に残る生家と、肉親や知人の思い出の中にあるといえましょう。

郷里を離れてから、すでに六十年も経つのですから、むろん親や兄弟は一人も残っておりません。知人も、年と共に一人減り二人減りして今では残り少なくなっていました。それでも、たまたま帰郷して久恵を訪れますと、山を見るにつけ、川を見るにつけ、子供の頃厭々ながら通学した道を見るにつけ、すべてがなつかしい思い出を呼びもどし、いつも温かく私を迎えてくれますし、永遠の心のふるさととして、いつまでも愛惜の念を捨てきれません。

ダムで湖底に

ふるさとの久恵は、丁度広島の東部を東南に流下する芦田川の左岸にあります。昭和二十四年に農林省が農業開発事業としてダム工事の計画をたて、丁度この芦田川の左岸にある三千町歩の耕地がその対象となりました。久恵は両面を山で囲まれた播鉢(すりばち)の底のようなところに当る場所でしたので、地形的な関係から湖底に沈む事に決まりました。

ダム工事は着々と進められ、昭和三十四年一月に完工式を終え、いよいよ貯水も開始されました。

ここに住んでいた二十二戸、二十五世帯の方々(私の生家も含めて)は、さぞ感慨無量の事と思います。私にしても、自分の生まれた、自分の育ったこの土地、まして東京に住んでも、暇をみつけて、年に幾度となく、このふるさとを訪れては、自然の美しさに人一倍の愛着をもっていただけに、あきらめていながらも、何とも言えぬ名状しがたい気持が致しま



生家熊田家（手前は自然石の石垣）

す。
今、久恵が湖底に沈んだ現実を眺めながら私は不思議な思いにかられております。それは、昭和三年、夫が生前、大妻家の系図を調査するために、高知県から霊能の人（霊媒者）を迎えました。その時「わしは大竜神だがお前の生れた家は水の底に沈むぞ」と聞かされました。私の実家は山裾にあつて、水には縁が無いし、まして水難にあいそうな地形とは、凡そかけ離れているだけに、馬鹿氣た事だと思ひながらも、この事は、妙に頭から離れませんでした。今にして考えてみますと、三十年前「水の底に沈む」と聞かされた通りですし、私どもの世界には、理屈や学問だけでは解決出来ない何かがあるという事を思い知らされた氣が致します。

話がそれましたが、この芦田川の流域は雨が年間千ミリ程度で、非常に少ないために毎年水争いが起っていたそうですが、この三川ダムが完成して、約一万三千二百平方メートルの水田をかんばつから守ることが出来、そのために米も二万五千俵の増収が出来る見込みがたったのだそうで、労力もそれだけはぶけ、将来はこのダムを発電、工業用水にも使用する計画なのだと聞かされますと、一本の木、一本の草に至るまで捨てがたい情を振り切つて立退かれた方々もあきらめがつく事だろうと思います。

七百年前、平家の落人（おちうど）が居ついたといわれる長い歴史のあるこの部落も、山裾のために訪れる人も少なく、ひなびたままでいたものが、近頃ではこの三川ダムまでバスが往復し、機関船やボートの設備をして、尾道、福山、三原、その他の方面から来る多くの人達で賑っているのをみますと、時代の流れをしみじみと感じます。ダムになる前に住んでいた二十世帯の方々のほとんどは、他所へ移転されましたが、私の生家と共に六世帯はダムのそばに移転しました。その五世帯の方は立派に新築されて居られますが、私の生家は七百年前の建築物と伝えられて居りますのですべての前のままの藁屋根で移築しました。

二つある誕生日

私の名は片仮名で「コタカ」。

私には年に二回の誕生日があります。私の生れた土地は「ふるさと」の中でお話ししましたように戸数僅かに二十二戸だけの盆地久恵で、およそ文化とは縁の遠い部落です。現在は三川ダムの水底深く眠っているこの久恵に、明治十七年六月二十一日の晩茶のとき（私の農村では、多忙のときには日に五度食事をとります。その四度目の食事を「お晩茶」といいます。）六人目の子供として呱呱の声をあげました。私は兄三人、姉二人の末っ子です。

ちょうど、田植最中のこんな忙がしいときに、男ならばともかく女の子が生まれるなんて、「コマッタことだ」と父はつぶやきました。こんなことから家中は「コマッタ児、コマッタ児」というのでいつかみんなは「コマッタ、コマッタ」と私をあやしていました。ところが十一月になって、田圃の稲は見事に実って刈入れもすんで、やがて俵に詰められた頃用件で来た長姉

の夫が、丸々と太って眠っている私の姿を見て、「この奥に鼻あり候」と書いた紙を顔に貼って帰ったそうです。勿論笑い話に花が咲いたことでしよう。そうしているうちに、この児はまだ入籍もしていなかったと始めて気付いて、出生届をしてくれましたのが、十一月二十日であったということです。名前も「コマッタ」では困りますので「コタカ」としようというのが私の名前のついた由来だということです。

熊田家のこと

明治十九年、父が四十八才で他界しました時私は三つでしたので、父のおもかげは覚えて居りませんが、田畑や山を私共六人の子供達それぞれの名儀にしておいてくれましたのが、あとになってみますと、先見の明があった人だと思えます。お蔭で私共六人は生活に心配がなく有りがたいことだと思ひました。

母は、未亡人となってからは、六人の子供達にとって、父代りにもならなければならないだけに、その苦勞は並大抵ではなかったと思えますが、氣丈な人だったのでぐちもいわずに、ある時はやさしく、ある時はきびしく、子供の教育にあたってくれました。私はいまでも、母は偉い人だったと思っています。母は五十二才で亡くなりました。

子供は六人、私は末子で、長姉は同郡の岡崎へ嫁ぎ、長男、小兵衛は家督の農を継ぎ妻帯しましたが故あって妻と別れ、後に大妻学校の売店や会計を手伝っていましたが、現在学校の舎

監をしている熊田みゆきと再婚し、昭和二十年学校が戦災にあつたので、その年に夫妻共々引きあげて国元へ帰り八十一才で亡くなりました。

次兄順導は、二十才で広島県神辺町（かななべちょう）の善光寺の住職となり地方教化にとめましたが、六十一才で他界しました。その後、その寺は住む人もなく仏像は神辺町の光蓮寺に預けて、村の集会所等に使用されましたが、これも山頂のこととて次第に荒れはてておりました。

ところがこの兄が先日、夢枕に立ち「自分の墓を山の下におろしてくれ」とのことで、私は七月（昭和三十六年）に帰郷しました折、山の下の方光蓮寺に移して亡兄の希望のようにいたしました。

次姉は、岡山に嫁ぎましたが長兄の希望で五才の長女を家に残して三才の次女をつれて実家に帰り、昭和三十一年八十一才でその生涯を終わりました。その長女は結婚して一男を残して早逝しましたが、その遺児は成人して目下岡山に住まっています。次女は私の実家を相続して二人の女兒を残して、昭和三十三年死去いたしました。

私の結婚

明治四十年四月、私が二十四才の時、鎌倉尋常小学校に就任することになりました。それから約一か月ばかり経った五月下旬、当時近衛師団の連隊長をしていた従兄の長岡清三郎氏から、思いがけなく便りが来まして、今度の日曜日に最近の写真をもって赤羽の自宅へ来るようにとのことでした。そこで、土曜日の午後勤めを終えると、急いで仕度を整えて汽車に乗り、東京にむかいました。

以前広島から上京した私は、ずっと父の弟の家でお世話になっていましたので、鎌倉に就任後もやはり根拠地は下谷区現在の台東区御徒町の阿久沢家にありました。したがってその夜は阿久沢家へ行き、清三郎氏からの便りのことなど話して、とりとめのない話に興じてやすみしました。

翌日、六月一日、有り合せの写真を持って赤羽の長岡家を訪れたのは丁度お昼頃でした。長



明治36年，20才の時，九段上の和洋裁縫女学校卒業試験のために製作した洋服を着て写したもの
この洋服の布地は木綿更紗，帽子は伯父の古いカンカン帽を貰って，これに自作の造花をつけたものです。

岡の叔母は、私の姿を見るなり「コタカさん、丁度いいところへ来ました。お客様にお膳を出して下さい」といわれるので、私は挨拶もそこそこに叔母の後からお膳を運びますと、叔母は「コタカさんです。よく見てやって下さい」と笑いながら給仕を私に任せてそそくさと去って行きました。そのうちに清三郎氏から「写真を持って来ましたか。お出しなさい」といわれて写真を手渡すと、お客様はそれを受けとり、写真と私をしきりに見比べていました。

お客様は大変がっちりした立派な体格で、陽やけた健康な顔にきりつと結ばれた口元が見るからにこわい感じの人でした。私は自分なりに、この人がお仲人さんだろうと、勝手な想像をしながらお給仕をしていました。間もなく食事も終り、お膳を下げて、叔母やその他の人と改めて挨拶をして台所に落付いてみますと、そこに半ダースのビール瓶と日本酒の一升瓶が三本空になって、ずらりと並んでいます。女中さんも眉をひそめて「今朝十時頃から、お客様とお二人でお飲みになったのでございますよ」というのです。元来酒のみの大嫌いな私はおどろいてしまいました。

そうこうするうちに夕方も近づいて来ますし、そろそろおいとましようとなりました。「ご馳走も届いている事ですから夕飯だけ召しあがれ……」と引き止められていわれるままにお座敷へ通りました。お酒も用意されていました。みんながお膳につくと清三郎氏夫人のお酌で、



師範学校、在学当時、寄宿舎にて撮す。

右端の花を持っているのが私。当時は、指先の出ている手袋が流行で、私も他の友達もみんなその手袋をはめて居りました。

中央で紋付の羽織を着て居られるのが舎監の先生、寄宿生はこれで全員でした。

まず清三郎氏が盃を飲み干し、次にお客様が飲みました。そして「それをコタカさんに……」という清三郎氏の言葉に、あわてて「私はいただけませんので……」とお断りしましたが、それではまねだけでも……と仰言るので、あまり強情に断るのも悪いので、まね事だけと思ひ、いただきました。すると今度は、その盃で清三郎氏が飲み干し、そしていうには「簡単ですがこれを以つて三三九度の盃といたします」あつという間もありません。おどろいた私は、悪夢の中をさまよう心地で、よたよたと台所に下がるなり、思わず泣きくずれました。

まさか、あのお客様と三三九度の盃をしようなどと誰が想像出来たでしょう。沢山の空瓶と、こわいあの男の人の顔が、脳裏を去来するのです。真暗な気持で、どの位そこに突つ伏していたでしょうか……暫くすると叔母が台所に来て、私を見るなり「コタカさんがここで泣いていますよ」と客間に告げるのです。すると、奥から清三郎氏が出て来て、「結婚というものは富くじをひくようなものだから、好いた同志と一緒になくても案外うまくゆかない人もあるし、反対に知らぬ者同志でも心を合わせてゆけばきつとうまく治まるものだ、さあもう泣かずに行つて御挨拶なさい」となだめられ清三郎氏夫人も叔母も代る代る来てはいろいろと言つてくれるのでした。お盃も終つた事ですし、こうしてみんなが進めて下さる以上悪い人でもあるまいと、半ばあきらめの気持で「何と御挨拶すればよろしいんですか」とたずねますと「『よ



明治三十八年九月十二日
私が二十二才の時、阿久沢の叔母
とうつしたもの。

ろしくお願いいたします』とい
うのです」と教えられ、泣きぬ
れた顔を洗って、いわれる通り
「よろしくお願いいたします」
と丁寧^{ていねい}に御挨拶^{ごあいさつ}をいたしました。
今にして思えばいじらしい
程純情^{じゆんせい}だったと思います。
それから次第^{しだい}に夕刻^{ゆふく}もせまっ
て来^きましたので、私^{わたし}ども二人も
そろそろおいとましなければな
らない時間^{じかん}になりました。その
頃はまだ赤羽^{あかばね}駅^{えき}に通^{とほ}ずる道^{みち}は、
両側^{りょうがわ}を麦畑^{むぎはたけ}に囲^{かこ}まれた静^{しず}かな田
舎道^{いんさだち}でしたが、二人でその道^{みち}を
歩いて帰^{かえ}るのに、手^てをとりあう

訳ではなく、一言の会話も交す訳ではありません。長身の巨体でスタスタと後も振り向かず歩いてゆくのです。小さい私は歩調も遅いので、どうかすると見失いそうになる人影を、白いズボン（その頃は六月一日から白ズボンになるのです）だけを目当に、走るように後を追って駅に向かったものでした。それでも一足先に駅に着いて二等車の切符を二枚買求め、後から来る私を改札の所で待ちうけてくれました。明治四十年代といえば、赤羽、上野間はまだ汽車でした。私が生れて始めて二等車に乗ったのもその時です。

上野に降りたつてみますと、池の端では丁度その日から博覧会が開かれていました。二人はそこを一めぐりしたのですが、その時になつても依然として話もせず、私の方を振り向きもしません。私は相変らず、かぶっているパナマ帽と白ズボンを目当に多勢の人波の中をかき分けるようにして歩きました。

やっと一めぐりした所で、広小路に出ておそばやに入りました。そこで私はそばを、彼は、酒とそばのささやかな始めての二人きりの食事でした。二階の広間で人も多く、その間話もなのまま唯食べるだけで、店を出てからも再び黙々として松坂屋の所まで歩きました。いま思いますと、これは私を御徒町の家の近所まで送ろう……という、やさしい思いやりだったようです。今更のように、何だかほほ笑ましくさえ思われます。

明治40年7月，長岡清三郎氏写す。

初めて，大妻と写した記念すべき写真です。
この時の印象は，ただ，怖く非常に大きな人
だという事でした。



これが夫良馬と私との結婚までの全てですがそれから又、私は再び鎌倉に帰って教壇に立っていました。するとある日清三郎氏からの便りで、「もう三三九度の盃も終ったことだし、いつまで別居することもあるまい、いつ大妻家へ引越してゆくかを知らせて欲しい」という意味のものでした。そして同時に同文の手紙を大妻家へも出しておくようにと書いてありました。

そこで早速「七月二十五日迄は授業があるので、当日終業式の終了と同時に帰る」という意味のことを書いて、約束の日に辞職願いを出し、荷物もろとも東京に引揚げました。

戻って見ると、すでに広島の実家からも紋付や丸帯なども届いていましたし、二十七日の午後、始めて丸まげを結って叔父達と長岡夫妻と連れられて、人力車で信濃町の大妻家へ入り、双方の親戚だけでごくささやかな披露宴をいたしました。丁度七月下旬の猛暑の折ですし、髪だけはきれいに丸まげに結いあげて貰いましたが、日頃鎌倉で学校の子供達と海辺で遊んだ陽やけの名残りと、汗と涙が重なってどうしてもお白粉がのりません。いつそのこと、生地のままをもらって貰うのだからとお白粉を落してしまいました。

夫は何もいりませんが、お腹の中では、真黒な花嫁の顔を見てさぞかしびっくりしたことでしょう。この日から私は名実共に大妻良馬の妻、大妻コタカとなりました。そして、良い馬の夫を更によい馬になって貰えるような、良い妻でありたいと希いました。



前列向って右より

虎吉の妻 愛子

朝治の長女 大妻 温

次 兄 大妻 虎吉

重長の次女 小森 フク

大妻 コタカ

後列向って右より

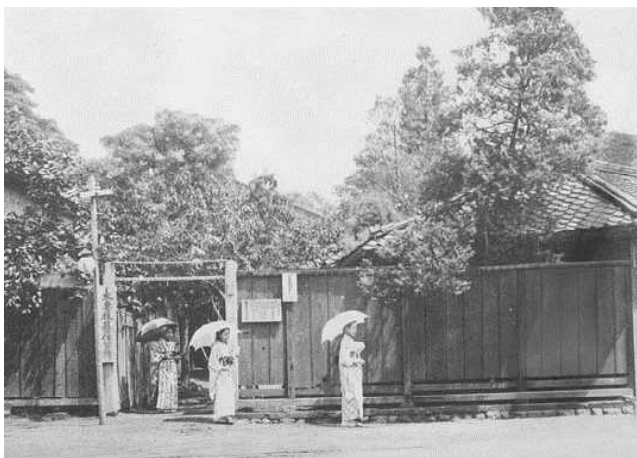
長兄 小森 重長

夫 大妻 良馬

弟 大妻 朝治

塾から学校までに

結婚しましてからは、教師としての職を退き、麴町紀尾井町の当時近衛師団長大島久直大將邸の小さな家を拝借して、夫とささやかながら二人だけの生活で、俗にいう新婚の甘い雰囲気とは大分かけはなれていましたけれどそれでも武骨者の夫が時々みせてくれるやさしさに救われてせつせと奥さん業に専心しました。夫は今風に妻をいたわる表現の出来ない人でしたが芯はやさしい性格でした。又恩儀を重んじる人で、ある日「自分には大事な恩人がある。その方は亡くなっているが、その子供の一人が事業に失敗したのでどうして親の墓石が建てられそうもない。だから自分はその墓石を立てたいが、それには月々費用を積み立てたいと思う。その事を承知して欲しい」というのです。その恩人とはどういう人かとたずねて見ますと、実は別れた先妻の御両親なのだそうで、この先妻の方は、悪口にきこえますが、どうした事か良馬の軍隊生活中に離別しなければならぬ事になったとのことでした。夫はそうした事に關係な



大正5年、山階宮邸内の大妻技芸伝習所の通用門

く、大変にその御両親にはお世話になったのだから、せめて墓石だけは何とかして作りたいというのです。夫の言葉をじつとかみしめてみればみる程頭の下る思いで、「そのお手伝は是非させていただきます」と約束して、それから私のやりくり生活が始まりました。夫が出勤したあとは暇で退屈だからという名目で、軍人の家庭の仕立物を縫わせて貰ったのもこの頃です。むろん経済的な理由からですが夫の面子も考えて今でいうアルバイトを始めた訳です。

この話と前後して、夫の実兄で親戚を相続している小森という人が、当時の時事新報の広告部長をしていましたが、何

かの手ちがいで辞職する事件が起り、良馬は早速、兄と女の子と男の子の三人を新婚早々の私共の家に同居させることに決心して、私に向つて「お前には気の毒だが離縁してくれ、兄や甥姪は肉親だから世話をしなくてはならないが、自分の収入だけではいたし方ない」と、思いがけないことを聞かされました。私はびっくりもし、あきれもしましたが「いったん縁あつて嫁いだ身はどんな事があつても棺に入るまで出ません。例えば、あなたが八百屋になつて車を引いてお歩きになるなら、私はその後押しを致します」と私の決意を申しました。結婚間もない妻に、墓石の積立やらその上兄一家の面倒までみさせることを気兼ねして気の毒に思つての言葉であつたのです。尤もそれを聞いた時にはびっくりいたしました、ともかく夫の気持を察して出来るだけの事は致しました。酒好きの兄弟の膳立てと仕立物はもちろん朝から晩迄働きました、なんととっても、当時十八円の給料ではやりくりが大変でした。それでも私はじめじめした気持にならず、この生活はこの生活で大きな子供が二人に、小さな子供が二人出来た母親のような気持になつて結構張りのある毎日でした。

そのうち兄は就職し、別居しましたので、またもとの二人きりの生活にもどりました。これまで日々忙しさに追いまくられていた私は、二人きりになつても何かしてないと気が落ちつかず、じつとしていますと忘れものをしてるようで物足りなく、小春日和の日など、日なた



大正6年、山階宮邸内において夏期講習会

に出ては好きな瓶細工や袋物の手芸などしておりますと、近所の娘さん達が見て教えてくれたのまれ、一人二人とお教えしている中にどこからか聞きつけて、いつの間にか夫の居ない昼間は、可愛い娘さん達で賑わうようになりました。元来私も子供好きですので、何となく近所の娘さん達の集まるのを心待ちするようになり、たちまち十五人もの娘さん達で、六畳と四畳半と三畳の狭い吾が家は華やかに賑わいました。

そうこうしている中に、夫は、宮内省の土木技師のまま山階宮家の営繕係の兼務を命ぜられました。これは山階宮家の御改築について香川事務官から宮内省に



大正6年，夏期講習会

対し人格の立派な技師を求めたいとの申込みで、良馬がその光栄の選に入ったのでした。そこで、私達も宮様の邸内に居を移すことになりました。

大島邸内にお世話になって居りました時は、娘さん達の人数も大変増えておりましたし、宮家へ移っても、私は出来ればこの仕事を続けたいという念願でした。幸い看板を出すことのお許しをいただきましたので、宮家に移ってからは始めて技芸教授所の看板を出して元通り継続することになりました。そこは千代田区富士見町で現在の嘉悦学園の筋向いにあたる所ですが、八畳と四畳半と三畳の家は相変らず、蜂の



大正6年、夏期講習会修了式

巣をつついたような騒ぎでした。当時、大正三、四年といいますが、国内にも事が多かつた時ですが、世界をみても又歴史的な大変動がありました。御承知のように、大正三年八月には国母、昭憲皇太后が亡くなられ、国民の涙もかわかない頃、第一次世界戦争が勃発しました。これはヨーロッパ全体を戦場として行われたために、戦争の災害は直接日本には及ばず、専ら経済上の援助をしましたために、思いがけなく財界はまれにみる好景気となりました。その影響もあって、女子の就学熱が高まり、私の小さな塾も、その頃には百余名にふくらんで居りました。



大正7年，新校舎に御台臨の山階宮大妃殿下
中央の男子は香川事務官

こうして志願者がふえてきますと、
なんとかして、一人でも多くの人に満
足してもらえような広い場所がほし
いと、日夜、夫と研究し、その心配を
かさねて居りましたが、いざとなると、
適当な場所が簡単にあるわけではな
し、夫が出勤したあと、ぞくぞくとつ
めてくるお弟子さん達を相手に勉強し
ながらも私は、教室の拡張が頭からは
なれません。こうした私共の希望が天
に通じたというのでしょうか、折よく
同じお邸の中に住んでおられた方が他
へ引越され其の後を拝借出来る事にな
りました。その家は畳が百畳も敷ける
大きな建物でしたから、実に思いがけ



大正8年、夏期講習会員
各地の手芸教師の人達

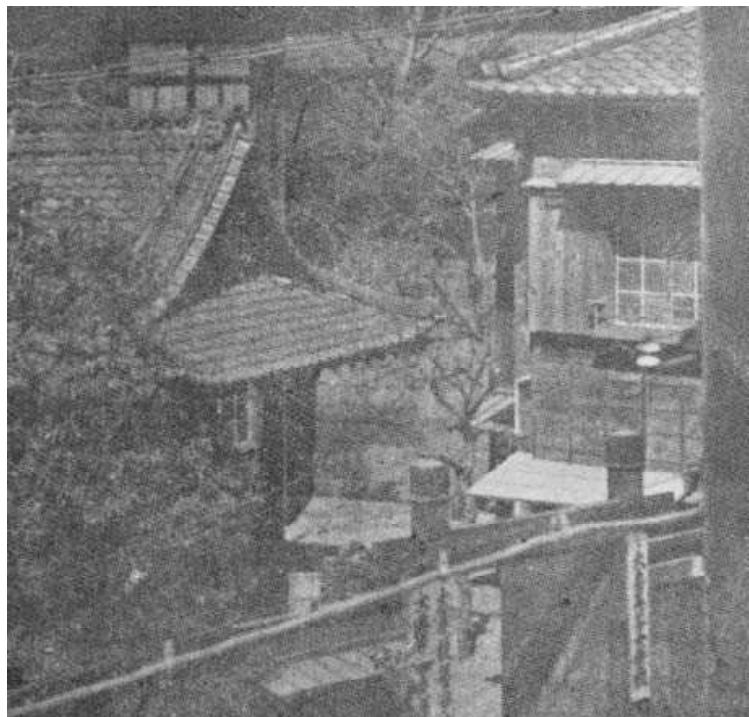
ないうれしい話でした。こうして理想的な広い場所も出来てますます元氣の出ました私は、技芸教授所を大妻技芸伝習所と改称し、真新しい看板のもとで、せっせと勉強を続けました。

ここに移ってからの思い出に、引越してから間もなく、宮家からのお歳暮として五十円をいただき、二人は本当に感激いたしました。その五十円のうち、十分の一の五円を夫は私の生命保険にかけてくれました。また銀座の天賞堂から夫が私を呼び出しますので、何事だろうと出かけてみますと、指環を買ってくれるというのです。日頃わずかしい顔ばかり見せている良馬が、

この日は大変に楽しそうにあれこれ選んでくれました。私も始めての主人からの贈り物にうれしさと幸を感じました。いつもは怖いばかりだった夫が示してくれたこの何げないいたわりに、私はどんなにはげまされたことでしたか……。もっとも家に帰ってみますと、二十一円もする四斗樽が運びこまれて主の帰るのを待つていました。主人のその時のうれしそうだった顔、自分で注文して来たのでしょうか、いかに酒好きとはいえ、こんな大きな樽をかかえこんでどうするかしらと思いつながら、五十円のうちの大方半分をさいても、好きなものを求める良馬の天真らんまんさに、ほほ笑ましさを感しました。

お話がそれてしまいました。元に戻して、こうして段々に塾も拡張されましたが、もともとたのまれるままに教えていたというのが実状でしたので、人はふえても一向に学則らしいものもつくらず、いわばこの頃は塾としては哺乳期にすぎませんでした。この大妻技芸伝習所と看板を変えてからは、漸くその個性が萌芽しはじめたように思います。

その頃、たまたま（大正五年五月）三越主催の学校展覧会があり大妻にも何か出品しないかとお誘いを頂き、編物、袋物、摘み細工、刺繍等の手芸品を十数点出品しましたところ、大妻の作品は大変あかぬけしていると当時の読売新聞婦人附録主幹小橋三四子さんがほめて下さったのを皮切りに評判をいただき、それが当時の東京府の大島視学や田所文部次官のお目に高く



写真右側の二階建物は、私共夫婦の住んでいた家で、階下は売店にしていたもの。

この建物は、夫が宮内省からの仕事で出張した際の旅費の残金や、廃品の売りあげ金等を順次貯金したりで、私達夫妻だけの金で建てた初めての家です。

とまり、ある日、直接お出でになり、實際をごらんになって、「こんな立派な成果があがるのでしたら、学校にしたらどうです。」といわれたのです。あまりに思いがけないお言葉に、うれしさの余り「願ひ出ればすぐに許可して下さいませか」と直接たずねますと、「多分許可になるだろう」というお返事でした。三越に作品を出品させて頂けたという事だけでも、私にとつては思いがけない喜びでしたのに、その上にこのお話なのでその夜、さっそく夫に相談いたしました。すると、「お前も好きな事だしやれる所までやったがよからう」と快よくすすめてくれました。その夜は興奮して休みましたが、さて、床に就いてから冷静に考えてみますと、夫は在官中ですしはじめから学校経営を目標として発足したわけではありませんから、学校としての仕事を果たせるかどうか、正直なところ深く考えれば考えるほど、自信も持てなくなり、こうした大事な事を一時の感激で決めるべきではないと、随分私は私なりになやみました。それでも各方面からの好意的な督促があつたり、夫も熱心にすすめてくれますので、やっと決心して、永年教育界にあつた知人の甫守護吾氏に書類の作成をお願いして、九月始めに願ひ出しました。もともこの塾の出発に際しては将来学校にしようとして計画したものではなかっただけに学校の認可申請は、その任ではないと思ひながらも願ひ出たものでしたから、その名も伝習所として認可をうけたのですが、周囲の方々からおすすりもあつて、同じ大正五年九月三十日附をもつ



大正11年11月、かねての念願だった中等夜学校の
設立が認可され、大妻技芸学校の看板の隣にもう一
つ、大妻中等夜学校の看板が掲げられました。

て「大妻技芸学校」と改名し、それに引続いて山階宮殿下の特別の思召によって、今迄拝借して校舎にあてていた官舎も拝領することになりました。

このようにして、大妻学院は多くの方々の御厚意と三越の展示会をもって黎明期を迎えました。当時は、私と私の教え子等まじえてわずか三人のささやかな教授陣でしたが、それでも学校としての組織になって来ますと、俄然元氣も湧いて来て、九月認可と同時に、家事文庫を出版することになりました。版も小さく内容的にも立派なものとは申せませんが、初めての出版物だけに、精根こめて書いたものです。第一巻には手芸を集録、その後数版出しましたが、いつとだえたか長続きしなかったように思います。

以上大正五年のことですが、翌六年になると生徒数も大変増加して来て、山階宮家内ではどうにも身動きのとれない状態でした。その上、たまたま宮家の御改築とあいまって、私達もどこか他へ引越さなければならなくなり、八方探しました結果、旧幕臣佐野善左衛門常世の邸跡で当時は柴田未亡人の邸になっていた現校舎のある麴町上六番町の土地、四百八十余坪が第一候補にあげられました。番町といえば、「目明き盲に道をきき」と埒保巳一で有名な学問の土地ですし、環境はよく理想的な土地ですが、貧乏な私共には、その資金がありません。仕方なく私の実家にもたのんだり、私たちを大変信用して下さっていた三室戸敬光氏に御無理をお願い

したりして、やっと土地と木造の校舎を買うだけの資金を集めました。三万円の借金といえば、私共にとつてはそれは大変に巨額なものでしたが、それでも学校建設の意欲にもえていた当時の私達には借金の苦勞どころか、かえって肩の重荷のおりたような、うれしささえ覚えたものです。

こうして私塾を始めてから九年目、ようやく大妻技芸学校も安定の兆をみせて来ました。

佐野桜のこと

余談になりますが、この佐野邸には「佐野桜」といって帝都名木の一つに数えられた枝垂桜がありました。この地に学校を移転しました頃には、現在の供給部に位置するところにこの桜があつて、毎年、先生方や生徒達の眼を楽しませてくれて居りましたが、大正十二年の関東大震災では惜しくも焼失してしまいましたので、その後には山階宮家から後継樹を頂きましたが、これも今次の大戦で空襲の際、跡形もなく焼けてしまいました。昭和三十年三月に、はからずも後樂園から枝垂桜を譲りうける事になりましたので、三代目として位置を少しかえましたが、現大学の中庭に昔の佐野桜を偲ぶよすがとして植えてあります。

宮家に御教授にあがる

大正六年十月、私が三十三才の時、伏見宮泰子さまに裁縫、手芸の御教授にあがるよう御下命がありました。

大正時代といえば現代とは違って、宮家にあがることだけで、それは大変に名誉なことでした。

その頃、伏見宮若御夫妻は麻布にお住いでしたから、週三度の御教授日は人力車を使って参りました。御勉強室に入りますと、向い合わせに二つの机が置いてあって、例えば和裁の日には、同じ地質の反物、たいていお召か縮緬のようなものでしたが、それぞれの机の上に一枚ずつ用意してあります。宮様の分には私は手をつけられません。当時はそれ程厳格で、現代でしたらかえって不思議に思いますが、そんな矛盾を少しも感じない時代でもあったのです。

さて、実際に御教授申し上げるには、宮様の材料に直接手をふれることは出来ません。すべ

て私に拝借したもので「このようにして裁ち切ります」と、実際にしてお目につけ、縫い方も同じようにお教えしますと、宮様はそれと同じことを御自分のものでなさるのです。宮様は、納得のゆくまで、何度でも同じことをやり直され、わからない時にはほどこいてまでもくり返し研究されました。その御勉強ぶりの大変御熱心なものには本当に感心いたしました。もちろん質問もなさいますし、私も手つきややり方などをお目につけ、御質問の都度、何度でも自分のものを解いてはお教え申し上げます。

手芸も、造花や瓶細工等色々お教えしましたが、中でも大変感心いたしましたのは、摘み細工の時でした。

例えば、今度は「鯉の滝のぼり」を作りますが、これこれしかじかの材料が必要でございまして申し上げておきます。一口に鯉の滝のぼりといっても、一匹の鯉にも、沢山の鱗があり、おまけに頭部と下部では鱗の大きさや色もそれぞれ違います。それを一つ一つ寸法や色にあわせて布を裁つのですから、考えてみる丈で厭になる程根気のあるものです。それを時には、夜十一時、十二時まででもかかって、準備をお一人でなさるのでいつも感心いたしました。和裁、手芸にかかわらず、あまりの御熱心さに心を打たれたこともしばしばでした。

その時の私の服装は、無地の紋付に丸帯と指定されていますので、特に夏は衿元から膝、帯

の下、膝裏等、汗ぐっしよりでした。その丸帯は芯地も一緒に四丈二尺（十四米）それを胴にぐるぐると巻くのですから、暑い夏などたまりません。大変忍耐を必要としました。そこで何とかして、夏向きに帯丈を短かく簡単に結べるものを……と思い考えたのが私の五尺帯の考案の動機ともいえます。

話は前後しますが、泰子さまは、現国立博物館長、浅野長武氏に御婚約が決定されましたので、民情を知るために民間から御教授にあがる人を選ばれたとのことでした。

ですから、御勉強中も、よくお母様がそばにお出になって、色々と民情をおたずねになりました。ですから、御勉強中も、平素使う言葉も、お父様を「おもうさま」、お母様を「おたあさま」などと、宮様と民間では色々とちがいますが、宮家のしきたりで私が珍らしいと思いましたが、盆暮の宮様からの賜わり物に、私共が「御中元」とか「御礼」とかと書くところに「いも」と書いてあったのです。何のことかと不思議に思っ、ある時その事を妃殿下（お母様）におたずねしました。すると妃殿下は「いもほどお粗末なものはありません、それで『いも』と書くのだと私の母から教えられました」と仰言るのでした。これはほんの一例であって、その他数々のことを、お教えするというよりも、かえって学ぶところも多く意義深い日々を過ごしたことでした。

泰子さまの御婚礼はさすがに伏見宮様だけあってそのお仕度は大したものでした。

たいていのものは高島屋にたのまれたのですが、地質はお召地で縞やかすり等の普段着類は、お母様の御厚意で大妻の生徒に縫わせて下さいました。その時の枚数は、着物四十二枚、帯三十七本という沢山なものでした。そのために浅野家では蔵を二つ建てられたとききました。

宮様の御教授に御下命いただいたことと並んでお仕立物の光栄に浴したことも、一生忘れることの出来ないうれしい思い出の一つでございます。

焦土から立ち上る

これまで幸運に恵まれていた私共にとつて関東大震災の被災は、悲惨な思い出で、今なお記憶に新しく決して忘れ去る事が出来ません。

大正十二年九月一日、相模湾の中央部に発生したこの大地震は、専ら東京と横浜に集中的に被害を与え、折からの強風に、二つの都市は一面焦土と化してしまいました。その時の倒壊家屋一二八・二六六戸、焼失家屋四四七・一二八戸、死者九九、三三一名という恐るべき数字を示したのです。同時に大妻学校もその災難をまぬがれず、殆んど一瞬にして校舎及び寄宿舎を崩壊し、更に校内で二名の死者を出してしまいました。

この日は丁度夏休みも終つて二学期の始業式、おまけに土曜日でしたから生徒たちも殆んどが下校した後、わずかに掃除当番の生徒と職員が居残るだけで、まさにお弁当を開こうとしたその瞬間、正確には午前十一時五十八分、突然激しい轟音と共に驚くべき激震が引続いて起つ

たのです。狼狽した生徒や職員が急いで校舎外に逃れようとしたその時、校舎に隣接している高さ四メートルの石垣がくずれ落ち、先にとび出した生徒九人があつという間もなく深い土の中に埋まってしまったのです。早速職員や小使さん達で掘り出し作業にとりかかりましたが、何しろシャベルや鍬の数も少なく、懸命の努力も容易に目的を達する事が出来ません。近衛聯隊に兵士十余名の来援をお願いして、三十分の後ようやく全員を掘り出すことが出来ました。

然し不幸にして本科技芸科一年生の岡井エイさん、別科裁縫科二年山中操さんの二人はすでに絶望の状態……また他の一人は足をひどく負傷して動くことも出来ませんでした。早速三人を戸板に乗せて、現大妻中学校の校舎の所にあつた岩佐病院に運びこみ、もしやとかなわぬ命に望みをかけながら、人工呼吸その他の手当を施しましたが、先の二名は遂に永遠に帰らぬ人となってしまいました。

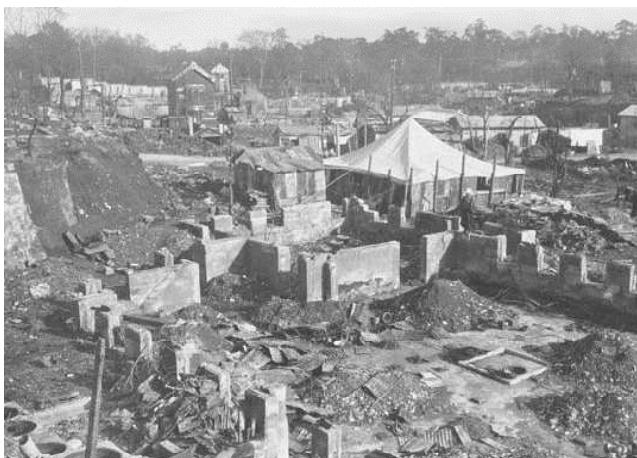
それでも残りの六人はかすり傷程度でたいしたこともなく自宅へ送り届け、重傷した一名と死亡した二名の亡骸^{なきがら}は、附添と共に病院にあずけました。そのうち岩佐病院も類焼となり再び安心する暇もなく遺骸を私達と共に五番町の公園に運び、負傷者は虎の門の愛生病院に移しました。一方残りの生徒達は他の先生方の引率で靖国神社の広場に避難させ、一応全員危険な場所からのがれることが出来ました。

そのうち、校舎の北の方、つまり今の家政学院の方角から火事が起つたため、大妻も類焼をまぬがれ得ないことは火を見るよりも明らかなことなので、生徒や負傷者の引率、あるいは重要書類の保管と、靖国神社、五番町公園の二手に別れて、その夜は全員火の粉の散る露天に身をゆだねながら不安の一夜を過しました。飢えと恐怖におののきながらあの夜の何と長く感じられたことでしょう。

午後八時頃、折からの強風に新築したばかりの校舎が、ゴーツとうなるような火焰の中のみこまれてゆく時、私は五番町の公園から唯々茫然と見送る以外にどうすることも出来なかつたのです。その夜は夢中にすごしてしまいました。夜明けと共にふと我に帰ってみますと、あたりは一面の焼野原、そばにはかわいい生徒の二つの死骸……あの悲愴な恐怖心は今でも私の心を苦しめて忘れることが出来ません。

二日の夕方三時頃、当時の教務主任、西野辰五郎先生が青山の自宅から作って来て下さったおにぎりに、やっと一日半ぶりでありついた時の美味しさ、うれしさ……涙の出る思いでみんなで一個ずつ分ちあっていただいたのです。

それと前後して、二人の遺体は無事自宅に送り届け、残りの百名位は一時の居場所として、富士見町の山階宮様のお許しを得て、千鳥ヶ淵のおほりに添って行き、御庭内の広場に避難さ



せていただきました。宮様の御厚意で、飛行機用の天幕や毛布などを拝借し、生徒だけは昨日からの疲労を休ませるために宮家のお庭に横にならせました。然し、職員にはまだまだ沢山の仕事がありました。一時の飢えをしのごために、あの広大な焼野原の外まで行って食料を求めなければなりません。五番町へ運び出した寄宿生の荷物と重要書類等をまとめて、車で宮家へ運んだのですが、二日であった一つのにぎりめししか食べていない私たちにはあまりに疲労が大きく、車の後押が出来るのです。車につかまってもつかまっても足がよろよろして進まないで又しても手は車から離れてしまいます。それでも暗くなるまでには、ブスブスとくすぶる街を必死で何

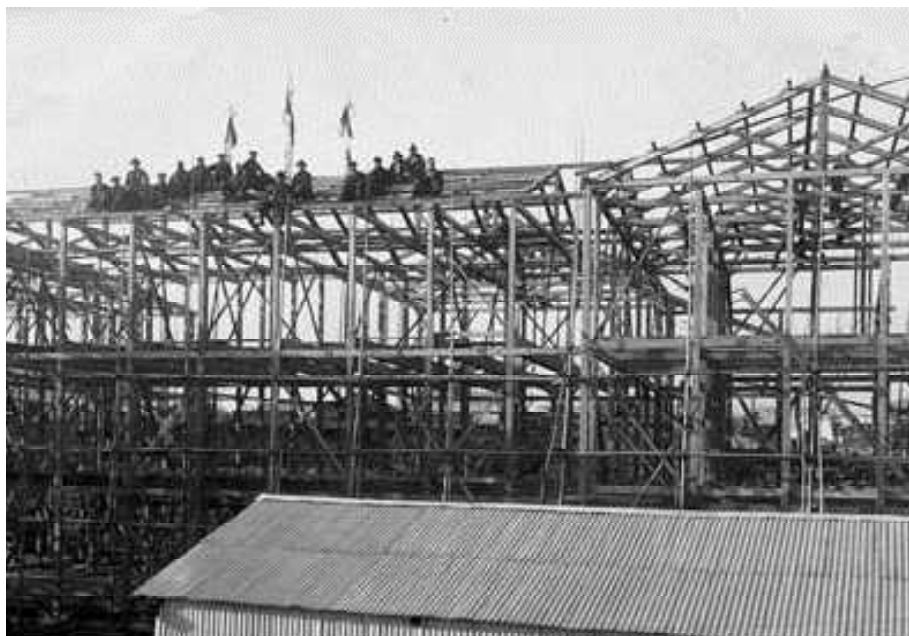
回かの往復の後に、やっと運搬を終えて宮家の天幕の下に落ちついた時、あまりのみじめな姿に、始めて涙を流したのでした。余震は猶も続いて家の中に居る人達も屋外に出てその夜は不安のうちにみんなで交代に淋しく休みましたが、夏だったということが不幸中の唯一の幸でした。その夜、宮家の邸内に仮泊したものは、意外にも二百九十七名という大人数だったので、それから二日経ち、三日経つうちに、遠方から来ていた寄宿生も親兄弟が迎えに来たり、都内のものは各団体を作つて送り届けたりして、人数も大部減つてゆきましたが、反対に食糧事情はいよいよ窮地に追いこまれました。

たまたま寄宿生の父親、茨城県取手町の根本嘉平氏が九月三日、子供さんをひきとりに来られた時苦しい内情をお話して食糧の補給をお願いしましたところ、その二日後即ち五日に米俵五俵と野菜類、更になべ、かま、茶わん、はし、おしゃもじ、歯ブラシ、石けん、その他数々の日用品を揃えて三人づれで馬車に積んで救援に来て下さったのです。意外な御厚意に、一同大よろこびでその恩恵に浴しました。根本さんの御親切は、いまだに忘れる事の出来ない感謝でございます。このお嬢さんはいまでも時折私の宅に来られますし、おつきあいしております。

またその頃、東京府にも方々から救援物資が集まり、配給制度となつて区民に配られました。



日本で初めての木造五階建ての校舎。
夫の設計によつた地階及び屋階を有
する総延坪、一千二百坪余の新校舎
で、これは大正十二年四月に完成し
たものでしたが、この年の九月、大
震災で、この校舎も午後八時、全く
火焰に包まれてしまいました。



大正十二年の大震災で全焼した
校舎再建の上棟式の模様です。

た。私も大勢の寄宿生と焼け出された二十世帯の職員をかかえていましたし、何度か当時の渋谷区長さんに頭を下げて、大妻学校にも配給物資を分けて下さい、と、どんなに乞い願ったかわかりません。でも、区長は「私立学校はあくまでも校長が職員や生徒の生活をみる義務がある」といつていつこうにとりあつて貰えませんでした。

配給場所とはいえ、皮肉にも大妻の校庭なのです。大妻の校庭が広いから大妻にしよう、と一言の断りもなく、どっさりきれいな布団や着物や、紙や、その他諸々の物資を山のように積みあげて、まるで私達に見せびらかすように区民に配給されたのです。くやくてくやくて涙が出るのをじつと我まんしながら、私達職員は交代で千葉や埼玉等近県へ買出しに行きました。この年の八月末によく校舎を新築、落成して支払いをすませて給料も払ったばかりの無一文でしたから、買いたいものも買えないというのが実状でした。こんなことを考えているとあの時の根本さんの御恩が今更のようにしみじみとありがたく感じられます。

一方、こんな悲惨な状態の中に在っても私達は従来通り授業を行う事を考えねばなりません。建てたばかりの校舎を失い、多くの教育資料を失い、再び塾以前の裸一貫から学校再建に奮起したのです。勿論、無一文から出発することが如何に前途多難であるかもよくわかっていましたので、一時に肩に重荷がのしかかった思いが致しました。それでも再建への熱意

は、校主を始め全員決して失いませんでした。若さのせいもあってのことでしょうが、それにもまして夫のはげまし、各職員のよき協力と多くの方々の御援助をいただいたおかげだと、深く感謝しております。

同じ時、現在の東京女子医大も、故吉岡弥生先生のお話を伺うと、出来たばかりのま新しい校舎や病室を失われ、着ていた洋服と聴診器の入った鞆だけでようやく逃げのびられたそうで、先生はその上、その直前に夫君の荒太先生が御他界になったばかりで、重なる試練にどんなにか心細く大変なことだったろうと御同情申し上げながらも、あの窮地を脱して、周知のような立派な学園を再建なさったその勇氣と御努力に自ずと頭のさがる思いが致します。

さて、当面の救援策としてあちこちの防災学校をお願いして、昼間の技芸学校の生徒は小石川の淑徳女学校に、高等女学校の生徒は渋谷の実践女学校に、夜間部の生徒は当時市ヶ谷の女子商業学校（嘉悦学園）に、それぞれ御同情を得て校舎を拝借することを得、同年九月十五日には第一回の生徒召集が出来る所までこぎつけたのでした。

この三校は、全く交通機関の麻痺した当時では、地理的に大変困難でしたが、それでも一日一回ずつは必ず市ヶ谷、小石川、渋谷の三校に徒歩で、ある時は履き物もなく、裸足のままで雨の日も風の日も授業の状態を調べに見まわりました。以来日課として、次の新校舎が完成す

る十一月末日まで一日も欠かさずにつづけました。

被災後数日は焼跡の整理に費し、九月九日には山階宮家で拝借していた天幕を校舎の焼跡に組みたて、一時の事務所にあて、校主の指揮で、職員は極力被災の整理と生徒の家の焼跡の訪問、および罹災状況の調査等炎天とたたかいながら連日復旧につとめ、一方校舎の再建も縁故を頼って福島県に行き、山から直接木材を買い求めることに着手しました。こうして日夜復旧に精出して、とりあえず一階建のバラックから始め、十一月末まで仮校舎六教室と事務所とを建設し、十二月一日より実践女学校と女子商業の教場を本校に移すことが出来ました。

その後、山階宮家の御厚意で御家を一戸拝借しましたので、同じく焼失した自宅の建築も忘れて、ただ一途に殆んどがむしやらかな気持で学校の復旧につとめたせいでしょいか大妻学校の復旧は、罹災学校中の先駆だったということでした。

思いがけない夫の死

昭和四年三月十三日の夜。

嘉悦孝子先生の学校に女子校長会の集りがあり、終って夜十時頃戻りますと、夫は体の具合が悪く息苦しさをうったえますので、翌朝かかりつけの山内医師に診てもらいますと急性肺炎とのことで、輸血をしたり他の医師に診ていただいたり、あらゆる手当をしましたが寿命はどうすることもできず、三月十七日の午後七時廿四分に五十九才の一生を閉じました。昭和四年三月十七日、この日は永遠に私の脳裏から消えさることの出来ない日となりました。

この頃学校は法人認可申請の最中で夫はその認可を得るために奔走し、病床につく当日文部省から帰って来て

「ようやく許可になったから帰途日枝神社にお礼参りに行って来た。おまえは浅草の観音さまにお礼参りをして来るように……………」



校庭で撮したものの

夫の写真は、大礼服やモーニングを着ると大変にいかめしい感じに撮れるのが多いのですが、これは柔和に撮れていて、きびしくはありません。けれども、反面、おもいやりのあつたやさしさが表情に出ているように思います。



講堂に設けられた、葬儀の様

といわれ、私は浅草から帰って夕食をすませて嘉悦先生の会に行つたのでした。思つてもみなかつたとつぜんの夫の死で、私も本当に気が顛倒いたしました。生前、夫が気にしていたのは学校法人の認可なのだから、せめて葬儀は学校の認可がおりてから執行しようと思ひまして、死去の翌日文部省に使いを出し「死去したけれども、法人の認可は死去の前にさかのぼつて出していただきたい」とお願いし、およそ何日頃認可になりましたかといひましたところ「目下議会開会中だから持ちまわりで印を頂いて許可を一日も早くするように取り計らいますが一週



間はかかるでしょう。」とのことでしたので、廿四日に葬式をすることに定め、お棺にはドライアイスを一ぱいつめて日夜講堂で親戚や先生、生徒たちで交代にお通夜をいたしました。廿四日の朝、十六日（死の前日）付で認可があり、神式による葬儀を学校葬として盛大に執り行うことができたのでした。

「あなたの後は立派にうけついでゆきます」と、亡き夫に固く決意を誓いました。

—— 夫の墓前にて ——

大妻の先祖兼澄のこと

兼澄は諏訪神社の末裔で大祝貞澄の曾孫です。父の孰澄が鎌倉時代に時の天皇から守護職を命ぜられて、倭村大妻の地に諏訪から移ってきて城を構えて職につきました。現在はその城跡は畑になり、周囲の堀は田になっています。そして県庁で「史跡保存」の碑をその城の中央であつたあたりに建ててあります。

兼澄の在職中に承久の戦が始まり兼澄は、官軍で土地の名大妻を名乗って大妻兼澄として出陣しました。岐阜で北条義時の軍を迎え奮戦しましたが利あらず、深山に入り自害をしました。子供は後に、後鳥羽上皇のお供をして島根県隠岐の島に行き、妻帯して四代の後、静岡県に住居をうつし、長曾我部の指南役となりその後長曾我部氏に伴われて土佐に赴き山内家に身を寄せ、後、豊臣秀吉が山内氏と争って降伏を山内に申出ましたが、大妻はこれをききませんでした。ところが後に再び争いが起つた時、山内が降伏しましたので、大妻は切腹をし、遺児は浪人



大妻氏居館址

大妻氏居館址と推定すべき地は県道の南側に位せる東西八十間南北九十間の地域である東北西の三面には堀を繞らした跡があり南は自然の窪地である平安朝式の館式城廓であるが当初はもっと小さかつたであらふ大妻氏は神家の一統であるが承久の乱に当り信州中仁科盛朝と二人きりで官軍に馳せ参じ忠勤を抽んでた其の後此大妻の地には宮高氏があつて是亦吉野朝の忠臣であつた大妻の地は勤王に輝く土地である

昭和十二年一月二十七日

長野 県

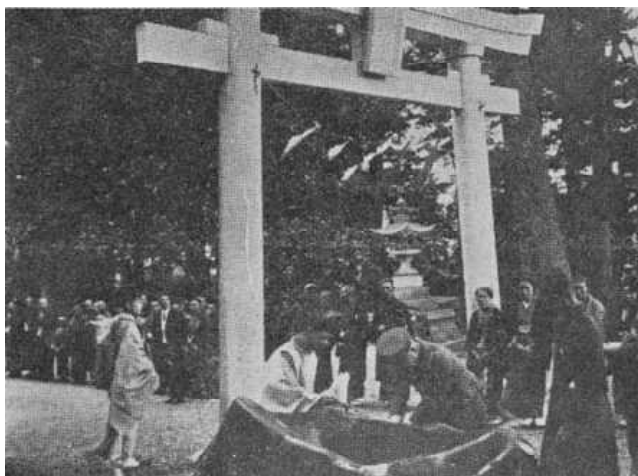


大妻神社に参拝のため松本駅につきました時出迎えてくれた卒業生や大妻村の方、旧職員の方、親戚の人達。

となり業を医に求めて代々医者を相続して、良馬はその後裔として生まれました。承久の戦に大妻兼澄が奮戦したこと、承久軍物語、太平記などに掲載されてあります。

現在大妻学院の校章である「丸に糸巻」は当時後鳥羽上皇から賜わった兼澄の戦場での旗じるしだったものです。

こうして大妻家は土佐に永住の地を定め、東京その他の地に居住しているものもいますが、子孫が今日もなお土佐に住んでおります。そして信州の大妻神社は先祖が祀られてあるために存命中良馬は毎年参拝していましたが、私も毎年一回は参拝して先祖に感謝しております。



大妻神社に阿部さん（当時大将）が参拝に行
かれ、手を清めているところ

阿部さんは当時、軍の参議官で、この日を
記念して正式参拝記念植樹と御手洗に揮毫
があります。

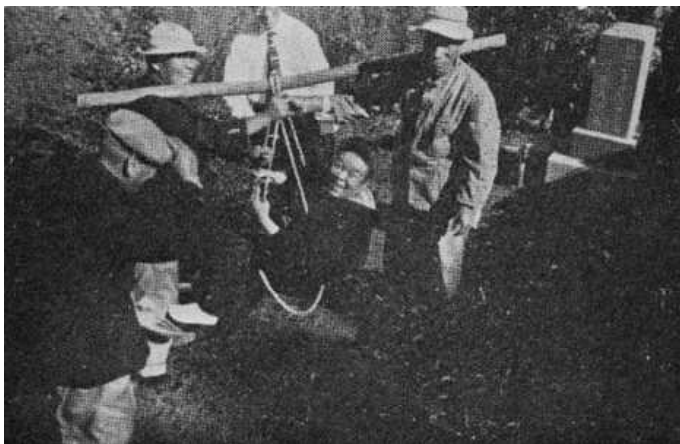
大妻家のこと

大妻家は男の兄弟ばかりの四人で、良馬は三男でした。長兄は親戚の家系をつぎ小森重長といい、男一人女二人の子供がりましたが、男児は早死、娘は結婚して、その後二人とも亡くなりましたので、娘の遺児（重長の孫）が小森家の相続をして居ります。

次兄は虎吉といい、郷里土佐に住み、長男は妻帯して上京、後土佐に帰り死去、次男は明治大学を卒業し、安田銀行に勤務し妻帯して、現在は土佐に住んで居ります。

末弟は朝治（ともはる）といい、この人は家業の薬製造を手伝って後、上京し発明家としていろいろのものを研究、特許もとった頭のすぐれた人でしたが、六十一才で亡くなり遺児は、長男が戦死、長女は長野に嫁ぎ、次女は嫁いで目下大妻同窓会に勤務しております。

このように良馬の四人兄弟はみんな死亡しましたが、先祖の墓は土佐「現在高知県土佐市」の小高い所に有りますので、四国に行きましたときには足の悪い私は、モッコでかついでもら



モッコに乗せて貰ってお墓詣りをしている処

って、墓参を致します。遠方なので毎年ゆくことはできませんが次兄を除いた、良馬、重長、朝治の三兄弟はそれぞれ東京多摩霊園に墓地がありますので、ここには毎月、夫の命日にあたります十七日にお詣りしております。

神仏への信仰

私の信仰心は夫の影響によるところが大きいのです。

夫の皇居をはじめ神社やお寺の前で、立ちどまって必ず丁寧に頭を下げる、敬神崇祖の念に徹している人で「御祭神は何であろうとまた私には現在直接の関係はないにしろ、ひろい意味でなにか人のために利するところがあつて祀られたのだから尊敬をはらうのだ」と言っておりました。

今、こうして亡夫のことなどを追想して居りますと、四谷見付を通つた折りも「東宮御所の御造営されるところだ」と説明してから工事場の方に向つて恭しく敬礼をした姿が思い出されます。そしてこのように、大変に律儀な頑固すぎる程の性格でしたから、元旦には伊勢へ、そして毎月、宮城、靖国神社、日枝神社、浅草の観音様の参拝を欠かしたことはありませんでしたので、私も夫に連れられてお参りを続けました。夫が亡くなった現在も大きな差支えない



限りは毎年お伊勢参拝と、毎月の参拝をしております。子供の無い私は、拝むところ、感謝するところが、今日の私をつくってくれたのだ、どんな時代でもこの敬虔な心持ちがなければ、人生と言う長い道は荒涼として、歩きにくいものだと思つて居ります。信仰については、その人の心持ち次第で、自由な信仰を持つことが良いと信じております。

昭和二十二年二月
伊勢神宮へ参拝のとき内宮の宇治橋を背景
にとつたもの

浅草寺のこと

私は十八才の時に東京に出て来まして父の弟、すなわち叔父の家にやっかいになりながら、勉強しておりました。

ある日、叔母につれられて浅草の観音様におまいりに行きましたが、その大変な人出に山の中からポーツと出て来た私は、ビックリして言葉も出ないほどでした。そして、叔母に「今日は何かおまつりでもあってこんな人がお詣りに来ているのですか」とたずねますと、叔母に「これは今日だけのことではなく、毎日の事です」といわれて、一層驚き、これほどの人が一生懸命にお願いする以上はきっと何か大きな御利益があるのだろうと深く心にやきつけられました。

しかし、その後は映画を観にいったり、十二階へ遊びにいったりするだけで、観音様を念じあげるためにおまいりしたこともなく無心ですごしておりました。その後結婚して夫が四十一

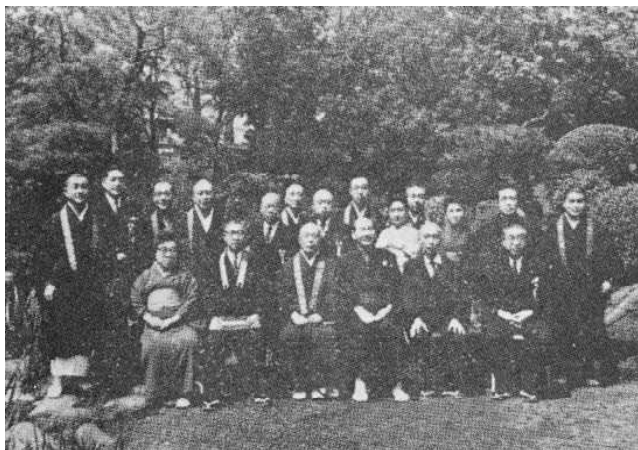
才になりました年、腸癌になり、あらゆる医者にみてもらいましたが、みんな助からないという死の宣告をうけました。その頃、家に入りに出ておりました大工さんから『苦しい時の神だのみ』という言葉もあるのだから一緒に願をかけてみませんか、とさそわれ、藁にでもすがる気持でつれていかれたのが、日蓮宗のお寺でした。一生懸命にそこに通って祈念しておりましたら一週間ほどすぎた頃隣りにおまいりしていた方が、観音様のあらたかな靈験を話して下さいましたので、ふと昔、浅草の観音様におまいりした時のことを思い出してお詣りする気になり、早速三週間の願かけをしました。そしてどうぞ夫の健康を是非よくして下さいと、一心こめて念じ、帰りにおみくじをひかせていただきましたところ、『病氣は長びけども本復すべし』という卦が出ました。私はこれを読んで元氣百倍し、必らず満願の日まで日参いたしますと、心もかるく帰宅しました。それから丁度十日程した日でしたが、又帰りにおみくじをひきますと『病、本復すべし』とはつきり出ていましたのでびつくりもし、うれしくてたまりません。ますます一心に祈念して南無観世音菩薩と念じあげました。こうして満願の日、心を静めて礼拝のちにおみくじをひきますと、どうでしょう、『病本復す』とでております。よろこびいさんで私は心が宙に飛ぶような気持で夫の待つ家に帰って来ました。山階家の門を入り、我が家の方へまいりますと、私どもの借りております家の縁側に山階家の会計主任をしておられる中

里という方が腰をかけておられ「だまされたと思って電気をかけてみませんか、上手な人がいるからたのんでごらんさい」といわれました。早速その方に来ていただきますと、「たまた目の目一目ぐらいつ、必ずよくなつて治りますよ」と元氣づけてくださり、電気をかけて帰られました。ところがその後で癌の病人をあつかつた方はよく御存知と思いますが、大変くさいおりものが沢山ありました。これは癌がくづれたのでしょう。それから薄紙をはがすように一日一日と元氣をとりもどしました。

目も開けられず、口もよくきけぬほどに衰弱していた夫が、次第に元氣を回復してゆく様子は、まことに観音様の御功德と申上げるほかなく、その妙知力の偉大さを今さらのように眼前に感じさせられたのでした。

夫が健康になつてからは、必ず夫婦揃つて十八日には、観音様の参詣をするようになりました。夫が宮内省に行つて居りました当時は時間をきめて、お堂の向つて左の角の廊下で待合わせする事にして、先に来た者はお堂のランカンにもたれて相手を待たつたりした事でしたが、その後夫は五十九才で亡くなりました。

その後も今日まで私は浅草寺の参詣をかかした事はありません。



浅草観音堂は、大正十二年の大震災ではまぬがれましたが、二十年の戦災では不幸にしてやけました。その後本堂は鉄筋で立派に出来上り、更に仲見世入口に雷門も建設されました。その落成式の日、昭和三十五年五月三日浅草寺境内の伝法院にて。前列左端が私。

京都 霊山

夫、良馬はその当時の言葉で忠孝、敬神、崇祖を口にし、また実行につとめた人です。そして、若い頃、つまり日露戦争までは軍人で、後に宮内省に奉仕し、日夜自分の希望通りの職にあることを無上の満足としておりました。

宮内省から出張の前後には、時間をさいて御陵や神社への参拝を楽しみにしたり、また休暇があれば私を連れて参拝旅行を計画してはよろこんでおりました。

京都の霊山に、土佐出身の坂本竜馬、また天誅組の吉村寅太郎を始め、二十数名の墓がありますので、夫や私が京都方面に出張、または旅行の度毎に、霊山に半日を予定して、酒その他のお供物をもって行き、近所で掃除道具を借りて草ぼうぼうの墓を、また秋は落葉をやいたりして心ゆくまで掃除をして参拝をしました。

昭和四年、良馬の死後も、私は少くも年一度は参詣しますが、その後これ等の墓も、護国神



社として立派な社が山の中腹に建てられ社務所も出来て、神職の方も詰めておられますので、掃除料を納めて掃除をおねがひしています。

以前の墓地とはうって変ってきれいになっていることを、良馬も霊界でよろこんでいることと思います。

(註) 天誅組……吉村寅太郎を筆頭に二十数名の人たちが組を作って忠節に励んだ。その人たちの墓所で写す。

へたの横好き

よく「好きこそものの上手なれ」といわれますが、私の場合はどうやらその言葉はあてはまらないようです。どちらかといえば「へたの横好き」のほうですから、改まって趣味というにはあまりにもお粗末だと思えます。

若い頃から邦楽が好きで、今でも足が丈夫で、その上暇があれば、いつでも琴や三味線の音で心を安らげたいと思います。疲れた時は静かな音楽もいいですし、力の汪溢している時は全身をゆり動かして聞くジャズもいいでしょう。テレビ等でそういう情景を見ますと、若い人たちを羨ましく思うこともあります。琴や三味線は、小学校の頃郷里のお師匠さんについて手ほどきを受けました。子供のこととて、遊びが半分でもあり、結局充分な習得は出来ませんでした。それでもともかく基礎はその頃身につけました。

私の郷里は、邦楽や舞踊などのお稽古事が盛んな所ですから、年に一度は総ざらいの形で演



追放中のある年、同窓会「秋の集い」
で琴をひく事になり、久し振りにおけい
このやり直しをしました。暇をみつけて
琴に向うと、いままで、こうした稽古事
に落ちついた時間をもてなかった日頃の
多忙さがうそのように思えました。

芸発表会が行われますが、子供の頃から数えれば、すでに何十年も経っているのに、今でもその時は郷里へ見に帰ることをたのしみに行っています。東京で見るプロ的なものとはちがって、素朴で新鮮で地方色豊かな独特の良さがありますし、つくづく芸事はいいなあと思うこともあります。私にとっては、郷里での娯楽的なたのしみとしては唯一のものですし、出来るものならいつまでも大切な行事として保存されたいとさえ思っています。

それさえも、上京して塾を開設するようになってからはなおのこと、あれこれと仕事にも追われますし、残念ながら家でゆっくり琴や三味線をたしなむ程の余裕もなくなりました。ですから、その後は専ら聞き手にまわっていました。追放になってからは、さすがに暇も出来てまいりましたし、琴や三味線の前に坐っては、昔を偲びながら静かなもので退屈をまぎらし、孤独な心をなぐさめていました。

その後、追放も解除になり教職の道に戻りますと、待っているのは沢山の仕事ばかりで、昼間から畳の上にゆっくり坐る等という事はめつたになくなりました。ですから趣味を云々している余裕がありませんでしたが、同窓会の秋の集いで、しばらく忘れていた琴をとり出して、六段の調を御披露し、同窓生の方達から、先生そんな趣味をおもちだったのですか……とびっくりされたことがあります。足も悪くなって正しい姿勢が保てませんので、とうとうあの時をかぎ



床の間の前に坐つて、目下詩吟の最中、写真では、大變に余裕のあるようにみえますが、実際には、われながら、上達しないのにあきれて居ります。

りに琴の音も私の住居から聞こえなくなつてしまいました。

観劇も好きですが、歌舞伎などの古典的なものより、むしろ現代的なものが好きです。松竹新喜劇など時間があればいつでも見たいと思ひますし、新派も好きですが、なかなか思うようには時間も無く、観劇も極くたまにということになります。

こんな具合ですから、大げさに趣味といつても皆さんの趣味のような熱の入れようとは全くちがつて、唯好きというにすぎません。けれどもそんな中で唯一つ、詩吟だけは今日も時々吟じております。昔はあつちこつちの講演

や授業で、声を出す機会が大変多かったのですが、いったん追放になりますと教壇には立てませんし、講演はしませんし、声というものから縁がなくなってしまう。元来、声というもの、健康に大変効果があるものだそうできて、よくみなさんから、声帯が萎んでしまますよ、体のために詩吟をと勧められていました。ある日、親しい方が詩吟の近藤先生を御紹介下さいましたし、もともと嫌いではありませんでしたのでそれを機会に、それではと、幾人かの同好者をお誘いして詩吟の勉強会を作りました。これが私の詩吟への第一歩です。かつて長らく胸を病んだこともありましたので、胸の健康には特に気を配っておりました。こんな訳で、詩吟は趣味と健康をかねた娯楽として、下手の横ずきでもかく今もお機会ある毎に吟じています。

何しろ多忙を極めた毎日ですから、浅く、広く、気楽に楽しむというのが私の趣味で、気の向くものなら今から始めても決して遅くはない……と一人で悦に入っています。さしずめ七十の手ならいというところですね……。

不思議なはなし

私の実家の裏山の中腹に竜神をお祀りした大成（だいじょう）さんという小さなお宮がありました。ところが明治の末頃、お宮の合併をする事になりまして、同じ三川村の川尻にある八幡神社に、この大成さんが合祀されたのです。大成さんの御神体は一抱えの太いちよつと曲った石です。その石は以前は農家の坂東さんの田圃の中にあつたのですが、邪魔になるので数人で邪魔にならないところへ運んで移しました。ところが翌朝になると、その石がもとの田の中に帰って来ているので、また運び出しましたが、こんなことが三日も続きましたので当時久恵の十三軒の部落の人たちが、

「これはただの石ではない、不思議な御霊験のある石だからお祀りしよう」と相談して、山の中腹にお宮を建てて、その中へお移し申し上げて、十三軒の氏神様として一年に一度はお神楽舞をしたりしていましたが、明治の末頃でしたか政府からの命令で合祀の時に、その石の御

神体も八幡さまへ移されました。大成さんは、こんな因縁のある神様ですが、昭和三年のある晩、夫が先祖調べをしていましたときに霊能者（霊媒者）の口をもつていわれましたことは、

「おれは、おまえの生れたところの氏神、大成だよ、おれは八幡様に同居させられたが居候はきらいだ、いまおれは、おまえの実家の藤の木に居て雨露をしのいでいるが、おれのお宮をつくってくれないか、小さい祠でよいか、土地の神様のお宮と、おれのと二つたのむ」

といわれて驚きました。早速主人と郷里に帰って調べてみましたら、もと大成さんのお宮のあった土地は大阪の人が買い、拜殿は売られて木小屋に、社殿は焼き払われて何もなく荒れ果てた有様なでした。

大成様のことを土地の人達に伝えますと、

「大妻は狐つきだ、迷信だ」といって誰も協力するどころか、一向に見向きもされませんでした。で、私はその土地を買いもどして祠を建て、八幡さまから御神体の石も移して、大成さんのお告げの通りに致しました。このお宮もダム建設で現在はダムのふちにお移し申し、県費を基にして小さいながらも立派な社殿も建てられ、以前迷信だと騒いだ部落の人達も、今では尊い氏神様の御神殿として心のよりどころとしております。



この中におまつりしてある大成竜神のご神体は石です。
向って左の小さな社は土地の荒神様をおまつりしてあり写真には見えませんが、それと反対側向って右に国常立尊をおまつりした社があります。
背景の山は三川ダムの周囲の山です。

追放から解除まで

「多くの学校の校長でありながら、あらゆる婦人団体に相当な役割をもった故をもって追放する」

この瞬間から私の長いさびしい生活が始まりました。昭和二十二年四月一日……。文部省適格審査からこの通知をうけとった時のおどろき、悲しみ……。あらゆる不安に唯、茫然とするばかりでした。

もちろん、その日から学校への出入りは一步も許されませんし、表面学校からは一文の収入を得ることも出来ません。昭和二十年三月九日の夜空襲で家が焼けてから、学校の校長室に四畳半と六畳の畳を入れて、私が四畳半に、土肥先生と二人のお手伝いさんが六畳に、着のみ着のままに住んでいた矢先のことで、学校内から立ちのかなければなりませんし、その日からの住み家に困る状態でした。

幸なことに、牛込の寄宿舎に六畳と四畳半の門番の家がありましたので、周囲を囲ってそこに移りました。これ迄一途に学校のためにと思っていた私には、一坪の土地も一軒の家も、一銭の貯金もなく、それでも学校の費用の中から日々援助をうけて、辛じてお手伝いさんと二人の淋しい生活をつづけました。終戦直後で、買いたくても品物もない時代でしたし、むろん着物等買う余裕もなく、夏になれば冬物を単衣に縫いかえ、冬になれば単衣物に裏をつけて寒さに備えたり、一日一日が忙しい毎日でした。これ迄も、私としては儉約の生活をして来たつもりですが、この時ほど物の大切さを痛感したことはありませんでした。

楽しみも夢もなく、空虚な毎日でしたが、たまにたずねて来て下さる方々になぐさめられたり、同じ境遇だった吉岡弥生先生もよく来て下さっては、「大妻さんは子供がいらないから余計気の毒だよ——」といわれながら四方山話をしてはお互を励ましあったりしたものでした。

不幸とはいえ、また寄宿舎の門番の家に住めたころは、住いについてはともかく安定していましたが、今度はそこさえも立ちのいてくれと学校側からいわれました。「校長が追放の前校長を庇護すると、校長が免職になる」というのがその理由です。私の後をついで下さった校長代理にはお気の毒だと思っても、私には移りたくても移る場所ありません。そんな生活の中で、同じ追放になった人や、そのご家族の中には、生活に困って自殺した人もあると新聞などで知

ったとき、一層心細い思いをしました。

そんなある日、調布に住む卒業生の熊沢さんが「安い売家があるが買わないか」と訪ねて来て下さいました。行ってみると安いだけに小さな家でしたが、建築許可のむずかしいころで、とびつく程のうれしい話でしたので、「それでは学校に話してその家を買ってもらおうようお願いし、三番町の土地に建てるよう準備しますから」といいおいて、助ける神もあるものだと感涙にむせびながら帰ったことでした。しかし、学校からは再び「近所には住まないでほしい」といい渡されましたので、やむなく家はとりこわして、その木材を熊沢さんの家の軒下に保管していただくことにしました。それを聞かれた熊沢さんは、ご自分の畑を貸して下さるといいう有難いお話で、多くの畑の中から借地を選びましたが、やはり学校側からの反対があつてとりやめになりました。そして木材は調布の人が買って下さいました。

そんなある日、九段の桃山書林から人が来て「追放でも参考書ならいいでしょう」といつて裁縫の本を書いてくれという依頼をうけました。「暇だから書きましよう。しかし今度は金、つまり家が欲しい」といいました。（以前東京書院から本を出した時には、私は印税はいりませんからそれだけ安く売って下さいといったことがありますので）そんな話をして桃山書林の人が帰った後三十分位したら、東京書院の橋口さんが来られて「家を建ててあげますから、書

林との契約を破棄して下さい」といわれるのです。書林とはまだ口約束だけですし、そちらをお断りしても書院のお世話にならなければならぬほど事態は切迫していました。幸運にして、万一このことが実現すれば生活の苦しさから一歩でものがれることが出来るのです。

そして、東京書院からの家はどんどん作られて、十月の完成と同時に、私はたった一台のわずかな荷物をもって引越して来ました。現在の住居がそれです。そんなある日「逗子に二間の家があるのでそれを借りてあげますからそこに引越しなさい」といわれるのです。私は、引越さないで何かよい方法をと申し出ましたが、暮も押しつまった十二月二十五日にび再会議が開かれ、一、名義変更について（大妻を九段に改める）

二、大妻コタカを千代田区内におかない

という二つのことを校長代理から提案されました。私には受理出来ないことで殊に大妻学校の名は永遠に存続させなくてはなりません。それは学校の十周年の記念式で校長が「私たちには子供がありませんので、大妻良馬の家は、私共夫妻で廃家しますが、大妻学校は法人として永遠に存続させるべきで、この事が実行できますよう、皆様方の御協力をお願いいたします」との意を申しましたことは校主の追悼録にも掲載してあります。山内先生も「創立者を逗子に追いやるのか、名義変更とかいうのはおかしい。校長と創立者のどちらかを犠牲にするなら、

現校長が犠牲になるのもやむを得ない」とおっしゃり、一瞬不穏な空気につつまれましたが、話の結末のつかないまま散会になりました。

その二十八日に三度同じ会合がありまして山内先生を始め、他の人の意見はいつも同じで物分れになってしまいました。

その後校長代理は、学校発展のために、ある事業をおこないましたが好転いたしませんので御自分から退職されました。そして、山内吉雄先生が代って本校の中心になって下さいました。が、先生は病院長であり都議会議員でもありその上、大妻学校の責任者として、いかにも御多忙でお気の毒に思い、適任者はいないものかと諸所へ御相談いたしました結果、昭和二十六年四月ようやく河原春作先生に学長校長を御承諾頂いて本当に安心の境地に入りました。

以上が私の追放中に、学校との間にあったトラブルの一面と学校の推移ですが、その間にも追放解除のためには自分でも各方面におねがいしたり多くの方々のお骨折をいただきました。ことに文部省に勤めておられる内藤誉三郎氏のご恩は一生忘れることは出来ません。大変に御尽力いただきました、そのうれしかったこと、ありがたかったことは言葉につくせないほどでした。

こうして、多くの方々の御協力もあって、昭和二十六年七月十一日、追放以来満四年五カ月ぶりに解除となって、私も、再び自由の身に帰りました。

思えば長い長い追放生活でした。二十三年の春と秋に二度の手術等の病氣と闘いながら経済の苦しさと精神的ショックとが入りまじって、こんなに苦しい生活はこれ迄にありませんでしたが、これからはきつと平穩でありますようにと、心の中で無事を祈っています。

受章の光栄に

褒章の記

大妻コタカ

早くから女子教育に意を致し 明治四十一年 裁縫手芸の私塾を開
設してより 逐次内容の拡充を図って現在の大妻学院に至るまで
前後四十有余年 その間校長院長 理事長の職に在ってよく経営に
努め終始学生生徒の教養に当る等 女子教育の振興に貢献したま
ことに公衆の利益を興し成績著明である よって 褒章条例によつ
て藍綬褒章を賜わつてその善行を表彰せられた

昭和二十九年五月三日

内閣総理大臣

吉田茂

内閣総理大臣官房賞勲部長

村田八千穂

昭和二十九年五月三日の憲法記念日に、藍綬褒章をいただきました。

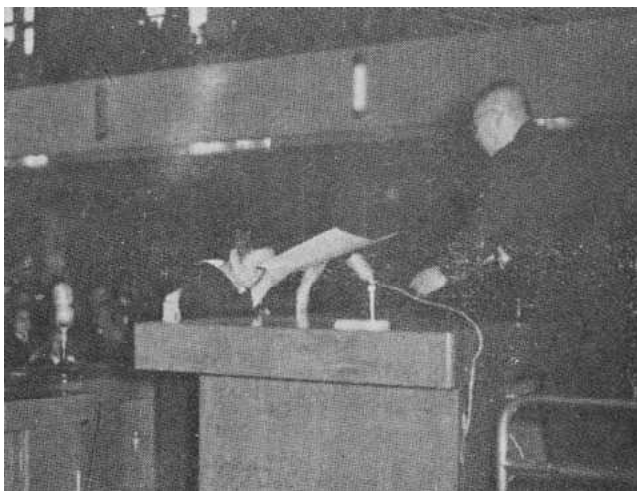
明治四十一年、ささやかな私塾を開いてから四十年余り、女子教育の振興に貢献したことを、表彰されたのでございます。

前の運動場から、明るい生徒達の歓声がひびいて来るおだやかな晩春の朝、私は久しぶりにゆったりした気持で、縁側で陽なたぼっこをしながら、なつかしい卒業生からの便りを見ておりましたら、柳葉さんが庭の木戸から入って来られ、いきなり「お母様この度は大変おめでとうございます」といわれました。私は、何がおめでたいのだからさっぱりわからず「何ですか、いきなりおめでとうだなんて……何かありましたか」といいますと、「まあ、お母さま、のんきでいらっしやる……褒章ですよ。藍綬褒章をお受けになるんですよ」「まあ、私が……」という具合で、全く狐につつまれたような一瞬でした。よく話をきいてみますと、朝刊に出ていくということ。ところが、私は、今日に限って、先に知人や卒業生の便りを見ていて、まだ新聞を見ておりません。早速新聞を開いてみますと、幾人かの受賞者の中に混じって、確かに私の名前も出ております。長い間、暗室に入れられているようだった私にとって、正直なところ、さすがによるこびの涙を禁じ得ませんでした。

その日のうちに新聞で私の受賞を知ってかけつけて下さった人達が、まるで自分のことのようによろこんで下さる姿を見て、つくづく現在のの幸を感じました。その中には、古くからの卒業生の顔も見えて今では立派な奥さんになったり、あるいは、子供も大学を卒業しましたなどと、うれしそうに報告して帰る姿を見ますと、自分のおなかをいためた子供はななくとも、私は、こうして自分の事をよろこんで祝に來てくれる沢山の子供達のいる事をしみじみとありがたく感じ、もつともつと幸に満ちた多勢の私の子供が欲しいと思いました。

二十二年にパージになってから、解除になるまでの五年間、一切学校の職務から手を引いていましたので、復帰しても、学校側は私を受け入れる態勢が整っておりませんでしたし、私個人としても、追放によって与えられた不快な打撃がまだ癒えず、気が滅入っていましたので、このしらせで、どんなに救われ、励まされ、元気づけられましたことか……これを機会に、長らくさえぎられていた陽の目に、やっとめぐりあえた気持で、前途に洋々とした夢を与えられました。

表彰式の当日は、雲一つなく晴れわたった日でした。表彰を受けるということは、いくら年をとっても子供の頃の優等賞の感激と少しも変らないものです。早くから身支度を整えて心身共に爽快です。それから暫くして事務局長の阿久沢氏の付添いで都庁に向いました。都庁には、



昭和29年5月15日、安井東京都知事より藍綬褒章を受ける。

すでに晴々とした装いに身をこらした何人かの受賞者の姿も見え、明るい笑い声につつまれながら、何という幸運なよい日だろうと思わないではいられませんでした。

功労者として自分の名前を呼ばれ、両手を差しのべて安井都知事から賞状をうけながら、明治の終りに私塾を開いて以来、震災、夫の死、更に追放……と体験して来た数々の苦しみやよろこびが、走馬燈のように脳裏をめぐり、只々感慨無量なものでありました。今日まで一途に学校の将来だけを夢みて来た私にとって、ともあれ、教育への熱意と業績を表彰されたことは、筆や言葉には表わしが



藍綬褒賞をうけるということだけでなく名譽に思っていましたのに更に天皇陛下から直接お祝の言葉を賜りまして、このよろこびと感激は、他にいい現わすすべを知らません。

いつまでもこのよろこびを忘れず、力のつづくかぎり学校と共に生きぬこうと固く心に誓いました。

皇居花蔭亭前にて陛下のおことばをいただく受賞者

前列中央あたりの女性の中、向
つて左端が大妻コタカ

たいよろこびだったのです。私の子供として育てて来た学校も、これでやっと大人になったという感じでした。

その年の五月十八日には、羽仁もと子さん、河口アイさんや、松平はまさんを始めとして、緑綬、藍綬褒章受章者三十五人が揃って、陛下へお礼のため宮中に参内することになりました。当日も、私は足が不自由なので阿久沢氏に付添って貰いましたが、都庁からは更に全員が都知事に引卒されて、十五台の自動車に分乗し、宮城坂下門に向かいました。坂下門に入って宮内庁前で下車しそれからは皆徒歩でしたが、私を含めた身体不自由なもの五、六人は、吹上の花陰亭門前迄自動車が許されました。ここで、都知事の案内でお待ちいたしておりますと、陛下は花陰亭門よりお出ましになりました。都知事は各界功労者であることを申され、その功勞に対し、陛下から感謝と激励のお言葉を賜りました。

陛下が御退場になってからは、宮内庁の方から宮城内の案内がありました。私は足が不自由なため、宮内庁で阿久沢事務局長が一めぐり参観して帰るのを待ちました。

前にも申しましたように、生前夫は宮内庁につとめておりましたし、私も卒業生が奉仕しているのです。度々、内部の様子を拝見してよく存じあげておりましたが、それでも、あの広大な面積や、森閑とした木立や、その中にどこまでも通ずる長い道を見ますと、騒音の街とかけは

なれたこの静寂が今更のように清々しさを感じさせてくれますし、この肅然とした雰囲気は、私たち日本人として、国家の象徴を認識させてくれるのに充分な威厳をただよわせて居りました。

また、その年の秋には、天皇、皇后両陛下御主催の、宮内庁園遊会に御招待を受け、人生の忘れがたい思い出の一つとして、強く心にやきつけられました。褒章のよろこびを、末長く記念するために、都庁からは大理石の置時計を、東京都私立中学、高等学校協会からは湯呑茶碗をそれぞれいただきました。

学校内外の関係者を始め、各方面の方たちによっても、色々の祝賀会を催していただきましたが、中でも東京連合婦人会の方たちが目黒の八芳園で開いて下さった盛大な祝宴は、当時都議会議員の村上さんを始め、多くの方々のお骨折をいただいたものでした。表彰状を手にして改めて自分の過去に思いを馳せますと、私が教育界に身をおくようになってから五十年間というものは平穩無事とは申せませんでした。それでも大学から中学までの学校と六万余の卒業生、四千余人の在校生があることは私の教育生活が、非常に幸であった事を物語ってくれます。もちろん、これは私一人の力ではなくて、その長い年月に協力して下さった先生、ご父兄、卒業生、在学生、その他多くの方々のお蔭ですし、その意味でも藍綬褒章は、その方たちを代表



していただいたもので、決して私個人がいた
だいたのではありません。こう思います時、
多くの方々にいまさらながら感謝の気持を抱
かすには居られません。

女子教育界で、追放解除者九名と藍授褒章受
章者四名のために昭和二十六年十二月二日、八
芳園でその祝賀会が盛大に開かれました。

左から大妻コタカ、山田わか先生、松平俊子
先生、吉岡弥生先生、川村文字先生、十文字
こと先生、竹内茂代先生
右端は守屋東先生。

五十周年記念のこと

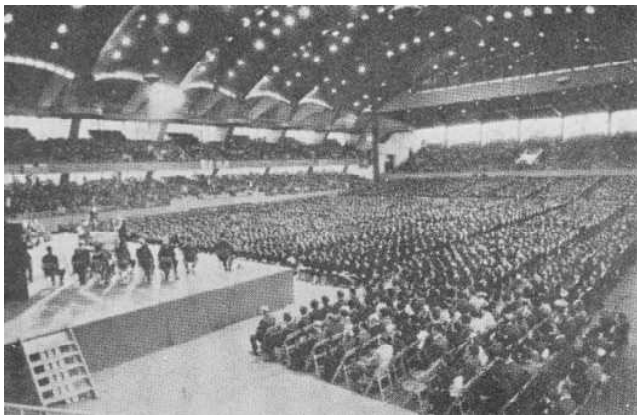
明治の末に私塾を開設して以来、大正の大震災で校舎を焼失、私のパージ、また学校発展の充実を最も必要とする時期に戦争でこおむったその被害……等々、思えば大妻学院の歩みも決して平坦なものではありませんでしたが、その苦勞も甲斐あつてか、去る三十三年十一月一日には、創立以来五十周年の記念式典を東京千駄ヶ谷体育館で盛大に行いました。

五十周年は、私個人としましては大変期待していた大きな行事の一つでしたので、無事その日を迎えた時はとてもうれしいことでした。当日の式典は、五十年の間本学院の隆盛に力を尽くして下さった多くの方々への感謝の集いとして、各界からも大勢の名士の方々を御招待いたしました。

なかでも、本校は教育の場であるだけに五十周年こそ文部大臣に、ぜひお出いださうとかねてから強く願つておりました。ところがいよいよ当日になって、全校あげて心待ちにしてい

るにもかかわらず、式が始まる時刻になり、劍木参議院議員、安井都知事、天野山梨県知事さん等も椅子につかれたのにいつこうに大臣が見えません。出席していただけないののだろうか、開会を目の前に控えていららしていました。そうするうちにも時間は容赦なく過ぎてしまい、定刻に式は始まりました。万を数える列席者で、あの広い体育館の会場はあふれんばかりの盛大さを極めていきます。私の挨拶もせまり、五十周年を迎えたよろこびと、しかし大臣に御出席ねがえるだろうかという不安とが入りまじった複雑な気もちのまま壇上にあがりました。挨拶をのべながらもただ一つだけ空席となった大臣の席がチラチラと目について、妙に気持ちも落ち着かないのです。私の挨拶がまさに終ろうとしている時、正面に黒い人影が、あれほど待ちわびていた灘尾文部大臣の姿が現れたのです。あっ!! と声の出んばかりによるこびました。もう九分通りあきらめていただけに、あの時のうれしかったことは他にいい表わす言葉もない位でした。予定通り大臣からも祝辞をいただき、これで今日の感謝の式典も大成功をおさめたと胸のかたまりをなでおろしたのでした。

後になってわかったことですが、その日はもう一校七十周年を迎える学校があったそうです。それでも大臣は「本来ならば七十周年記念の式典へ行くべきだけでも、当学院はまだ創立者が健在で感謝の会を開いたということに敬意を表したい」とおっしゃって本校へ来て下さ



広い体育館の会場はあふれんば
かりの盛大さをきわめました。

—50周年記念式典—

ったということでした。

その言葉をきいて、私は唯々うれしく
て胸が一杯になりました。またその日は
今は亡き浅沼稲次郎さんも本校が予定も
していなかったのに、御父兄の一人とし
て出席してくださって、祝辞を頂き一段
と盛大さを増したのも決して忘れ得ない
記憶として胸深く残っております。

こうした数々のよろこびにひたりなが
ら記念すべき五十周年の式典をつつがな
く終えたのでございました。

心残りのこと

——桜島見物——

かつて、九州の鹿児島県の県庁から大蔵省を通じて、私に講演に来てくれないかという御依頼がありましたので、鹿児島東半分を一週間の予定で講演にまわったことがありました。その時最後の日を半日で切りあげて桜島の見物に行くつもりで楽しみにしておりましたが、その日になって女子師範学校にも来てほしい、という希望がありましたので、桜島行のかなわないのを残念に思いながらも、この度は講演が主だから又の機会にゆずることにして講演をすませ、その日のうちに帰京の途につきました。それから後になって、又同じような方法で鹿児島西半分の講演の依頼がありました。やはり一週間の予定でしたが、今度こそ桜島をみて帰ろうと、講演のあいまにも大変心待ちにしておりました。

ところが、幸か不幸か、又桜島行を予定していた日に、土地の高等女学校からも講演の依頼がありましたので、せっかくなので、せつかくたのしみになっていた桜島行が又駄目になってしまいました。又機会があるだろうとは思っていましたがそのまま、ついその機会にも恵まれませんので方々旅行はしましたが、桜島のことだけは心残りになっています。

宮廷関係のことなど

大妻学院は私塾として開設した当初から宮家のお世話にあずかっているのですが、その他いろいろな思い出をたどって宮家との記録をつづってみました。

明治四十三年、夫、良馬が宮内省からの命令で、山階宮ご造営を兼務することになりました。宮家邸内に私どもは住いを移すことになりました。以前から私は住居の附近の方々に手芸や裁縫を教えておりましたので、引続いてこの仕事をつづけることもお許しいただき、お教室もいただきますし看板もかけさせていただきました。展覧会やバザーには大妃殿下を始めとして宮家では、皆様がお出になつてご覧下さいますなど、大変に私の仕事の上にお心をお寄せ下さいました。大正十一年十月二十日の新校舎の落成式には、山階宮武彦殿下と同妃佐紀子殿下のお二方がお揃いで台臨されました。ことにこの日は両殿下ご結婚の直後で、新婚旅行のご日



この校舎は、もと山階宮から
拝借していたものをいただき、
現在の三番町十二番地に移した
もので、校門は華頂宮家の門の
ご改築の時、古い門を頂いてこ
こに建てたものです。

左のしだれ桜は、佐野善左衛
門の愛木「佐野桜」です

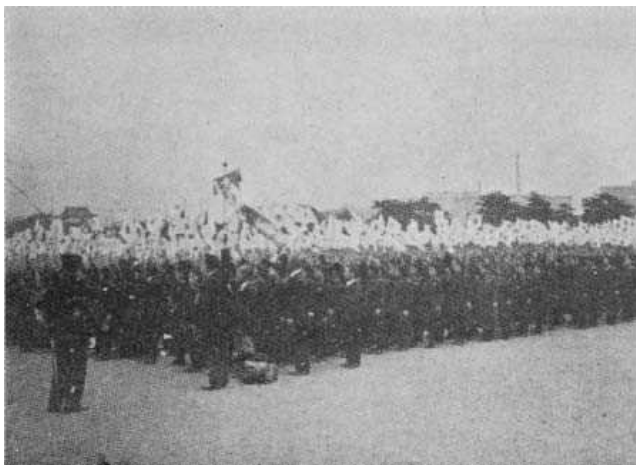


大正14年秋
照宮様に献上の手芸品

程を一日繰り上げて大妻のためにお越し
下さいまして一同感謝したことでした。

照宮様御降誕

先日亡くなられました東久邇成子様が
両陛下の初のお子様としてお産まれにな
りました時は、そのお守役として大妻専
門学校の卒業生金田きよのさんが上るこ
とになりましたので、学校としてもお祝
を……というので手芸品を作ってお贈り
いたしました。



昭和8年12月23日，皇太子殿下御誕生の日の旗行列

皇太子殿下の御降誕と御成婚

皇太子殿下の御降誕の時は、今度こそはぜひ皇子様でありますようにと朝に夕にお祈り申し上げておりましたら、皇子様だったので、全国津々浦々に至るまで国をあげての大よろこびで、旗行列やちようちん行列等と大さわぎでしたが、本校でも旗行列やちようちん行列と共に演芸会をして盛大にお祝をいたしました。

そして皇太子様の御成婚には、手芸で鯛を製作しました。この鯛はコツポ編で全部を埋めたもので、うろこの数は大、中、小、合せて、二千五百余枚ありま



す。三越での御成婚記念展覧会に出品し
てお祝の気もちを表わしました。

皇太子殿下のご成婚を奉祝するために東京手芸協会主催で日本橋三越を会場として手芸編物展覧会が開かれました。

本校ではこれに高等学校家庭科三年生有志三十余名が共同で、コッポ編の大鯛を出品しました。出来上った鯛は、三人がかりで会場に運びこみこれを会場の入口に飾りました。

この鯛で一層めでたい気分が高まった様子で展覧会の目的を達する上に大きな力となって、大変よろこばしいことでした。



中庭にあった五重の塔

疲れたとき、この五重の塔をながめま
すと心の安らぎを与えられました。

五重塔

赤坂見付上の元閑院宮家の前を電車で
通りますと、いつも宮家の御門の中に五
重塔がそびえているのが見えました。

大正十二年の大震災にも幸に宮家は
お焼くなりませんでした。ところがその
後五重塔が見えなくなっていました
ので、そこを通った時宮家に伺ってみま
すと、塔は邸内に倒れていましたが、宮
様は元通りに修復なさる御意志はなさそ
うに伺いましたので、大妻にご下賜願
いたいと申し上げましたら、ご承諾いた
だきましたので、これを専門家に修理させ
て大妻の校庭に建てました。



三笠宮さま御結婚式の前、高木家へ御祝品を持参の時、左端が私

これは惜しいことに、昭和二十年の戦災で焼失しましたが、この塔は、ある時京都で閑院宮様が総裁で開かれた展覧会に出品されたものを、製作者が宮様に献上したといういわれのものでした。

三笠宮さまの御結婚式

もと、高木子爵の令嬢百合子様が三笠宮妃殿下として、ご結婚になるとききましたので、私は五尺帯をお祝いにもって高木家へあがりました。応接間の下座でお待ちしていますと、お母様と、百合子さまがお見えになり、私に上座へとお



昭和12年10月21日，現在大学の鉄筋コンクリートの校舎落成式に台臨の閑院若宮妃殿下のおかえりのところ

勧めになりながら「きょうはまだ高木家の娘だから」と申されましたが、ご辞退申し上げて居りますと茶菓のご接待があり、お礼のご挨拶もいただきました。

それからおよそ一カ月の後のある日、私は再び高木家へまいりましたが、その時はすでに、御結婚後でしたので、お母様に「妃殿下は御機嫌でいらせられましょうか」とお伺い申上げましたところ「妃殿下はお元気の御様子と伺っております」と、敬語で御挨拶になりました時お子様であつてももう民間人ではなく宮様とおなりになりましたので……折り目の正しさを拝見して、今でも印象深く心に残っております。

無言のうちの教訓

私がこれ迄に歩いて来た長い人生行路の中で、直接に逢った人から、或は書物の中から教えられたことは大変沢山ありましたが、その中で特に私の先生から教えられたことを中心にして恩師の想いでを綴ってみました。

私の学んだ小学校は大変草深い山村でしたから、生徒は少く、先生といえば校長先生といわる教師が一人の、たった二人つきりだったのです。だから、校長先生もみずから教壇に立っておられました。その校長先生も、時には公用などで学校を空けられるので、その時は、四年生の成績の良い生徒が一、二年生を教えにゆくのです。

私も好きな数学や体操を時々教えていましたが、ある日、いつものように教壇に立って数学を教えていますと、校長先生が「オタカさんは（みんなそう呼んでおりました）手まねなどし

て、教え方が実にうまいねえ」といって、ニコニコしながら、私の授業を見てほめて下さいました。その時私は子供心に「私は先生になろう」と思いついたものでした。それが、私の「先生」と呼ばれながら現在に至る一つの動機となったものです。今思えば、この時先生にほめていただいて自信のようなものが湧いてきたのだと思います。

また、四年生の始め校長先生が（毛利先生というお名前でした）古い諺の「なせばなる、なさねばならぬ何事も、ならぬは人のなさぬなりけり」と黒板に書いて、どんなことでも努力すれば必ず出来るということを教えて下さいました。それ以来、私はその諺を心に秘めて、「今年こそは」と、強く心に誓い、とにかく一年間、精一杯に努力しました。

いよいよ卒業式の当日、私は真先に自分の名を呼ばれるという期待に胸をふくらませ興奮した面持で廊下に出ました。ところが事実は反して「奥助一！」と呼ばれたのです。私は気負いこんでいただけに、すっかり気ぬけがしてしまいました。ほめられた時のいいようのない得意さを思い出して、「今度こそ」という頑張りをふるいたたせました。この負けず嫌いで、結局、現在までをやり通して来られたのだと思います。

思えば、毛利先生のおかげです。

高等小学校に入ってから、その心掛けでまず、勤勉しました。しかし、当時は男尊女卑の思



岩村先生近影

想の根強い時代でしたから、女である私はいくらやろうと思っても、どうかすると心がくじけそうになるのを、いつも女生徒に向って「男に負けてはいけない。頑張りなさい」と力強く励まして下さるのが岩村武雄先生でした。この先生は、私の少女時代に、目をかけて激励して下さった先生でしたし、大変なつかしい想いが致します。

先生は、すでに九十四才のご高令ですが、今もなおお元気で郷里の広島県駅家にいらつしやいます。最近、掛軸の絵を画いていただいたりして、今も唯一人の恩師としてお慕い申し上げております。お目にかかった時、目をほそめてよろこ



向って右端 大妻コタカ
そのとなりが堀越千代子先生、昭和二十三年四月四
日九十才にて亡くなられました。

んで下さる先生のお姿を拝見して、白寿といわずもっともっと、百年も二百年も生きていただきたいと祈らずにはおられませ

ん。
その後、九段の和洋裁縫学校に入りましたが、その頃の和洋は、まだ塾から学校になったばかりの歴史の浅い時でした。校長先生は堀越千代子といって、大変小柄な性格のやさしい、いつも丸まげに結った上品な洋裁の先生でした。
どんなことがあっても、決して怒ることもなく、私などグループでいたずらをして、先生を困らせ

たことも度々ありましたが、いつも笑って許して下さいるのです。堀越先生の御主人は、大変嚴格な方でしたが、いつも帚と、ハタキをもってあるき、校舎のどこにきずがついたとか、どこがガラスが汚れているとか、そんなことをこまかく先生に注意されてきました。どんなに大きな声で叱られても、どんなにガミガミいわれても、先生は決して口応えなきらず、「はい、どうもすみません。今後気をつけます」と静かにお詫びなさるのです。その姿は、若い私共にも大変美しく思えて印象深く心に残っております。

『嫁しては夫にしたがい、老いては子にしたがえ』という言葉は、古いかも知れませんが、でもそういうつましい女性をみると、やはり感じのいいもので、私も堀越先生に見習って、随分無理なことをいう夫にも黙ってしたがったものでした。

その頃、和洋の先生に佐香春子さかとうという方がいらつしやいましたが、その先生も大変従順でよく働き、口よりも実行して私どもを導いて下さいました。

余談になりますが、ごく近年のこと、佐香先生が徳島市で学校を開いていらつしやると伺いましたので、お目にかかりに行きました。

先生も御高令で、あいにく御体も弱つておいででしたが、昔の面影もしのばれて、大変なつかしくお話をさせていただいたのでした。その時「大妻さん、今年のうちに又来て下さいよ」と



恩師佐香先生

昭和32年11月16日、二度目の御病床をたづねた時
前列右端 大妻コタカ 一人おいて 佐香先生
昭和33年3月30日84才にて亡くなられました

おっしゃるので、再会を約束してうしろ髪のひかれる思いで帰って来ました。

そしてその年に約束通り又徳島へ佐香先生を訪ねてゆきましたが、それが、先生と私の最後の面会でした。

岩村先生を除いて、ここに書いた三人の先生とも、もうこの世にはいらっやいませんが、先生方の精神は今も忘れないで私の心に通っております。

講堂の火事

学校の講堂が不慮の火災にあったのは、去る三十四年二月二十三日の夜でした。その日は、午後五時から十時迄編物手芸協会の理事会があつて、十時に帰宅し、丁度、郵便物の整理をしているところへ、学校から「今、学校の裏が火事です」という電話がかかって来ました。え？火事！！今まで学校に居て何事もなかったのに、どうしたことか……と、心がこおりつく程びつくりしました。

とたんに家の中もざわついて、「大変です。出てごらんなさい、講堂が焼けています」というのです。急いで庭先に出てみますと、夜のことだけに、パチパチという音も不気味にひびいて、火の手が五階だての鉄筋校舎よりも高く、ものすごいいきおいでのぼっていました。「これは大変だ！！こんな大きな火事では廊下づたいの校舎が焼けるのはまぬがれないだろうが、ご近所にだけは火が移らないように……」と、ひたすらに祈りました。幸い、風がありませんで



急をきいてかけつけた光陽写真館が
撮影したもの

したので、火の手はまわらず、只、ま上にばかりのぼりつづけました。火力があまりに強いのに私は、庭先で一人類焼の心配をする以外手の施しようもありません。そんな中で、まつ先に心に浮かんで来たことは、講堂の一番近くの部屋にアルバイトをしながら勉強している十六名の女子学生の寮のことでした。

「あの人たちはどうしているだろう……けがはなかっただろうか……」と心配しているところへ、息せき切って、荷物を背負ったり、かついだりして、避難して来ました。

「荷物よりも体の方が大切です。火

事の現場に近寄ってはいけませんよ」と私は人々に叫びました。

それでも私は、思いのほか、あわてませんでした。今考えてみるとどうしてあんなに冷静でいられたのか不思議な位です、火事もさることながら、人命にかかわっては……と年のせいかその方が大事だといえる程、精神的な余裕があったようです。

十一時には、テレビやラジオでこの火災が放送されたそうで、近所はもちろん、随分遠方からも、数え切れない程多勢の人達がかけつけて下さいました。そこへ、都会議員の曾根光造氏が消防団長として、びしょぬれの姿でとんで来て下さって、「類焼をまぬがれました。ご近所は大丈夫です……学校は五階の窓から校内に火が入りましたが、少し焼けただけで消しとめました」といわれた時、はじめて胸のかたまりをなでおろし「ありがとうございました」と涙ながらに何度も御礼を申し上げました。ご近所の方達には、畳も布団も家具もびしょぬれになられて、大変申し訳なくお気の毒に思いましたが、類焼をまぬがれたことが不幸中の唯一の幸でございました。思い出せば、今でもお詫びし切れない気もちで一杯です。

焼失した講堂は、本校の建物の中でも最も古い建物として愛着が深い上に、卒業式や入学式、或いは同窓会の集いに、寮祭に……とつきない想い出の深い感慨深い講堂でしただけに、焼失したことは、心惜しい気がいたしますが、反面、「災転じて福となる」の諺の通り、あの火災

によって、「今度は立派な講堂を建てよう」と、奮気する礎となり、本校が一段と大きくなる一つの犠牲だったと思つてあきらめています。

その後ご父兄の方達のご協力をいただいて新しく大講堂の落成をみて、ようやく火事騒動の結末がつかまりました。

忘れ得ぬ人たち（その一）

東郷さん

昭和四年十月の大変快い秋晴れの日でした。その頃、国民からの尊敬を一身に集めておられた東郷さんが大妻学院において下さったことは、大変うれしい思い出の一つとして今でも忘れることが出来ません。

一口に東郷さんといっても、戦後の若い人たちには名前すらわからない人達が多いと思いますが、かつて軍国主義はなやかな時代には軍人の権威たるや大変なもので、大威張りで肩で風を切って歩いていたものです。まして元帥といえ、現在ではそれに比較出来る地位はないといつていい程の高い位でしたから国民はひたすらに神様のようにあがめまつっていたのです。

恥を知る

大正甲子夏
大妻校
東郷

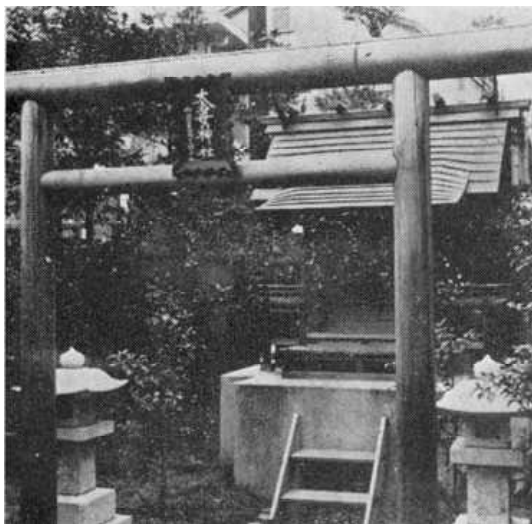
かねてから、本校ではその東郷さんを大変お慕いしまして、「恥を知れ」の校訓を直筆で書いていただきたいという希望をもっておりましたので、大正十三年夏のある日校主（私の夫）が直接伺っておたのみいたしましたら東郷さんは、私共が親しい友人と接するのと同じような態度で応対して下さい、思いのほか快よく引き受けて下さいました。

そして、大妻の先祖が長野県の大妻村に、氏神として祭られてありその分神を大妻学校の庭に祭ってあって、どちらも鳥居を建てるのでその額をお願いいたしましたところ、墨をすりなさい、書きましよう、すぐに校訓と、鳥居額の「大妻神社」の四字の大小二枚とを書いて下さいました。

又、東郷さんのお住居と本校は、目と鼻の近さなのに（現在千代田区三番町に在る都立東郷記念公園）生徒達はいまだ一度も正装のお姿にお目にかかったことがないので機会があればと思っていました。

ある日、東郷さんの元副官であった、佐々木さんという人が（元中

大妻学校内の中庭に建てた大妻神社の分社。
この鳥居にかけられている額は東郷さんの直筆。



佐で親しくしておりました）本校においてになりましたので、お話ししましたところ、佐々木さんが東郷さんにそのことを伝えて下さいます、それではいづれ折を見てと仰言って下さったとのことでした。「それでは靖国神社の秋季例祭には東郷さんが御参拝になるでしょうから、その時刻に靖国神社の御門前から両側に正列してお待ちしよう」ということになりました。

その前日、打合わせのために、東郷さんのお宅へお伺いして、こちらの計画を申し上げますところ、「雨天になると困るでしょう。参拝の帰途学校の方へ寄りましょう」といわれました。



いよいよその当日は、おいでをお待ちしておりましたら、間もなく自動車の中から金銀のきらびやかな大礼服の胸間にさん然と輝く勲章をつけ、黄金作りの元帥刀というまばゆいばかりの盛装に身をつつんだ東郷さんが降りて来られました。私共は玄関にお出迎えました。私共は一人一人に笑顔で会釈なさり、かがざられてある御自身がお書きになった「恥を恐れ」の額を一瞥なさってから、いかにも軍人らしい、活発な態度で「皆さんと親しくお逢い出来たことを大変うれしく思います。これから大いに教育につくして下さい」とやさしい言葉を受けました。八十四才のお年とは見えないお若いそして、いかめしい中にも時々ほころびんに相好をくずして談笑



された東郷さんのお姿が、今でもふっと思い出されてまいります。

東郷さんに関する記事は、翌日一せいに各新聞で報せられました。東京日日新聞では「大礼服の儘女学生に、東郷元帥が講演、けさ大妻女学校で」とか国民新聞では「珍らしや東郷さん、礼装姿を女学校へ」等々、殆んどが四段ぬきから五段ぬきの見出しで大きく報道してありました。

この日のお話は、「恥を知れ」の校訓を主題にして『恥を知れ』とは大きくも小さくも解釈出来るが、国が恥を知らなければ国辱となり、皆さんが恥を知らなければ他人にひけを取るようになるのだからどうかこの点を十分覚えていてほしい』と温顔をひとしを和らげて講話され、非常な感動をうけました。

宮城道雄さん

広島県出身で、現在東京に在住している女子の人達だけで、広島県女子郷友会というサークルをつくっています。これは年に一回集会して相互の親睦を目的としています。

宮城さんも広島の出身でいらつしやるので、ある年（昭和二十九年）この郷友会で、先生の演奏をおきかせ頂き度いとお願ひにありがとうございました。

温和な、物静かな先生は、ひっそりとした感じで、演奏される時のあの情熱が何処にかくされているのかと思われる程でしたが、その反面、卓越した名人の重厚さが、その静かなうちにも現われて、おかしがたい、気品というのでしょうか、迫力のようなものが感じられて、宮城さんと対座している間じゆう私は、武人の真劔勝負のような緊張を味いました。



昭和二十九年、六月十二日

護国寺境内の月光殿で開かれた郷友会に、出席された人達の記念写真です。この郷友会は毎年行なわれますが、丁度これは宮城さんに演奏をお願いした時の写真ですので載せてみました。

年配者から若い方達まで、みんなが郷里を共にしているというだけの結びつきで集っている会ですが、まるで昔からの知りあいのように、ざつくばらんに、一日を愉快に過しますので私もこの会に出席するのが楽しみの一つでもあります。

中央浅野様御夫妻、その右が宮城さん

石田一松さん

やはりこの方とも郷友会での関係で、ぜひ会に出席して何か演って頂き度いとお頼みにあがった時のことです。

その頃は丁度、代議士としての仕事もあり、その他に「のんき節」の舞台を踏んで居られましたが、代議士であり、芸能人でもあるという特別に華やかな人生を送っている方としては、想像も出来ないような質素な生活振りでした。非常に腰の低い方で、気持よく会に出席してくださるといふ御返事でした。なんのバックもなく、孤立してヴァイオリンを片手に、時勢を批判して独特の味をみせるその芸域、代議士に当選して、政界でも異彩をはなつた存在だった石田さんに、もう少し御鼻肩さんがついて、生活を豊かにしてあげられたら、政治家としての活躍も、もっとめざましくなるに違いないと、しみじみと感じた事でした。

吉岡弥生先生

私より十三年長で、それだけに、私なぞよりは何十倍もスケールの大きな、とにかく偉い方でした。卓見のあるお方で、その上、ずい分若い人を可愛がられました。私もその可愛がっていただいたうちのひとりで、なにかにつけて、会合があると「大妻さんを入れなさいよ——」と必ず指名して下さって、あれこれと私を引きたてて下さったものです、私が、まがりなりにも今日あるのは、吉岡先生のお蔭が大きいと思います。

先生は大まかな性格で、その上非常に自負心の強いお方でしたから、何ひとつ男に劣るところはなくつねに堂々と自分を主張なさり、男の人からもまた尊敬される偉さを持っておられました。婦人会などの仕事でも、信用なされると、「あんたにまかせよ」といって任せきりで、まったく腹の大きな方でしたが、反面非常にこまかい点に気をつく方で、昭和四年三月私の夫が亡くなりました時、夫の生命保険が七万二千円ありましたが、これを全部学校に寄付する事に決めて居りますと、これを或る人からいま、きいたといつて車で私の処まで、夜の十時頃だったのでしようかお出で下さって、「まだ決定したのでなければ、その七万二千円のうち、本当は



昭和十三年六月、主婦之友社で、廃物利用懸賞募集の審査会の時の写真
この会も、吉岡先生が、私をその審査委員に推せんして下さったもので、忘れたい写真です。

右手前は吉岡弥生先生

中央 大妻コタカ

左端は、杉野芳子先生



昭和二十七年八月

吉岡先生と御一緒に北海道に講演旅行した時のもの。これが、今にして思えば、先生と御一緒した最後の旅行でした。

向って左から

柳葉先生

大妻コタカ

吉岡先生

半分位はほしいが、それも出来なければ、せめて三分の一は、自分のものにしておきなさいよ。そうしないとあとで困る事がきつと起るよ。」とわざわざ言っておきました。まだこの事は確定的ではなかったのですが、その翌日、会議の席上で、その意見を述べましたが、そんな心配はないから、全部寄附するよといわれ、七万二千円はそのまま法人に入れましたが、パージになった折はじめて私財というものの一つもない自分をみて、あの時の吉岡先生のお心遣いが、今更のように思い出されてなりませんでした。大きなことに氣を使われる方は、結局小さなことにもよく氣がつかれるものです。

にこやかで、親切で、非常に情のある、とにかく天性の風格のあるお方でした。

忘れ得ぬ人たち（その二）

これ迄に学校のためにも、私個人のためにもお世話になった方々は数え切れない程多勢ありますが、ここにはその中で特に学院の発祥の頃お世話いただいた方について述べてみました。

大島久直氏

大島久直氏は、元陸軍大將で、その頃近衛師団の師団長をしておられました。私の夫も軍人だった関係上、この方の御邸内に家を借りて住まわせていただいておりましたが、前にも書きましたように、当時夫は宮内省に勤めておりましたので、夫を送り出した後の時間を、好きな手芸や裁縫でたのしんでおりました。すると御近所の奥さんや娘さんたちがそれを教えてくれとおっしゃるのでお教えしていたのがもとで、大島邸内に塾を開くことになったのでした。

大島さんも快く御協力下さいまして、家を一軒無料で借して下さって、明治四十一年に正式に塾として呱呱の声をあげました。

こんな訳で、大島さんの御夫妻には大変お世話になりました。忘れられない方の一人です。

香川景之氏

後になって、夫は宮内省から山階宮の營繕係の兼務を命ぜられましたので、大島邸から山階宮邸に移ることになりました。香川さんはその頃の山階宮の事務官をしておられましたので、その時私はせっかく始めた塾だからこれからも継続したい、又、出来ることなら看板をかけることも許していただきたい、と申しましたら、香川さんが、いろいろと御好意をよせて下さって、宮様からそのお許しを得て下さいました。

ここで看板をかけ得たということは、塾からの発展の糸口を与えられた、大変ありがたいことだったのです。

三室戸敬光氏

昭和六年に、山階宮家が御改築になることに決まりましたので、当時、校舎として拝借していた家を賜りましたが、そのためにはどこか他の地に移転しなければならなくなりました。

土地を新しく買わなければなりません、その時三室戸敬光さん御夫妻が、御自分たちのありったけの貯金を引き出して借して下さったのです。おかげで、無事に土地を買い、校舎も出来

て、一応学校としての体制を整えることができました。

桐 島 象 一 氏

この方は、当時東京市とよんでいた頃の市長をしておられました。個人的に大変御好意をよせていただきましたので、殊に、大正十二年大震災火災にあつて困っている時に、御夫妻の着物を、私共夫婦のために使いにもたせて下さったりして、非常に助かったこともあります。こういう数々の御親切には今でも大変感謝しております。

藤 井 利 誉 氏

この方も、まだ東京市と呼んでいた頃、その教育局長で、本校が法人組織にする時など、大変親切に御指導下さいましたので、おかげで、とても早くその認可を受けることが出来ました。

大沢豊子さん

大正から昭和にかけて、婦人記者の方々とはだいぶおつきあいを願いましたが、故人では大沢豊子さんに大変御厄介になりました。

大沢さんは、当時の時事新報の記者で、後にNHKのラジオ担当となり、三月の節句の人形の着物の作り方を放送してほしいと依頼に来られたのが最初で、それが幸に好評だったそうで、その後一週間に一回、裁縫、手芸、作法その他主婦や若い人たちの心得といったものを放送させて下さいました。こうして大妻コタカの名を出していただき、学校の発展についてもこの大沢さんは忘れ得ぬ方です。



昭和九年九月二十八日

東京会館で行われた「大沢豊子さんを労らう会」

大沢さんには私ももちろんですが、当時随分多くの方が、新聞で、NHKでお世話になりました。そこでこの日は大沢さんにお世話になった人達が主催となって大沢さんに感謝するというパーティーがひらかれました。

当日は出席者も多く盛大なもので、いかに大沢さんが、多くの有名、無名の人達をひきあげておられたかがわかります。

立っている方が大沢豊子さん

その左、吉岡弥生先生

向い側 嘉悦孝先生

三輪田元道先生

大妻コタカ

竹中繁子さん

竹中繁子さんも新聞記者の一人で、当時朝日新聞におられました。この方も私のことを大変推薦して下さいまして、朝日新聞の家庭欄にたびたび、手芸、裁縫の投稿をさせて下さいました。そのおかげで、大妻コタカの名前と、ひいては大妻学院が、広く世間に知られるようになって来ました。

後になって、竹中さんは新聞社を辞められ老人ホームをつくるために千葉県へ居を移されましたが、それからは全く音沙汰もなく、どうしていらっしやるかと案じながらも、お手紙一つ差しあげることも出来ませんでした。ところが、先だつてふとしたことから、千葉県に八十六才の御高令で、今もなお御健在と知りましたので、是非お逢いしたいと思い、一度連絡をとりましたが、まだおめにかかれずにおります。

私のためにも、学校のためにも、竹中繁子さんは恩人のお一人ですので、機会があれば是非、学校の今の姿をみて頂きたいような気持がいたします。

西野辰五郎氏

西野辰五郎先生は、大正十一年二月一日から昭和九年一月まで大妻学院に勤務して下さった方で学校のためにはかけがえのない大事な人でした。

二月といえば、すでに次の学年の生徒募集にどの学校でも大童ですが、大妻でもそのために一生懸命でした。こんな時西野先生はわらじばきに、から草模様の木綿の大風呂敷を背負い、どうみても先生とは思えない質素な姿で、街角や駅前のお店先に、広告のビラ貼りをたのんだのであるかたのです。誰もかれもが背広に皮靴の世の中では想像も及ばない姿ですが、それが却って西野先生らしくして、ほほ笑ましくさえありました。おかげで、その年には思いがけない大勢の生徒が集まって来しました。

翌年九月の関東大震災には、迫ってくる火の手をよそに、校内の重要書類や寄宿生の荷物を運び出すために、又生徒の引卒、亡骸や負傷者の家庭連絡に……息つく暇もない仕事に、懸命に奔走して下さったあの姿を思うと、もし西野先生がいらつしやらなかつたらどんなに大変だったろうと思わないではいられません。

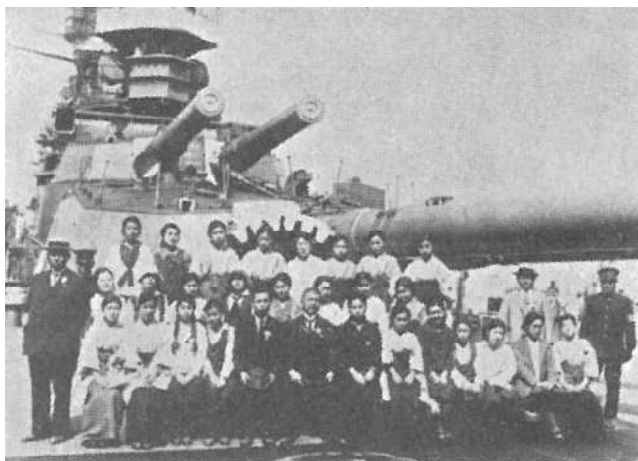
まる一日、恐怖の中で食べるものもなく、飢えをしのいでいた私たちに始めて食べものを運んで下さったのも西野先生でした。交通機関もなくなってしまうので、青山のお宅からの遠い道のりを歩いておにぎりをもって来て下さったのです。

一つ一つ書けば限りもありませんが、西野先生ほど学校のために熱意を示して下さい方も少ないと思います。学校が今日あるのも先生のお力添のおかげだといっても決して過言ではありません。

おかげで学校も一日一日と発展を示して来ましたが、そういつまでもいいことばかりはつづきません。

ある日、五階の百畳の畳敷教室で職員会議の終ったとき、メガネをしまおうとなさる手つきが変なので、それをみていた先生たちがこれはおかしいと気づいて、さっそく布団を敷き、医者を呼んだり、御家族の人たちに連絡をとったりして、みんなつきつきりで看護しましたが、とうとう意識不明になられ、みんなの懸命な看病も空しく、年のあけた一月二日の早朝、学校の中で静かに逝去されました。

惜しんでも惜しんでもその気持ちは尽きません。これは私ばかりではなく職員、生徒はもちろんのこと、ひいては父兄までも、みんなのいつわらない心でした。



西野先生のお人柄と、あの熱心さが今日の学校を育てて下さったのだと信じて、いつまでも感謝の気持ちを忘れないでおります。

昔は、毎年の修学旅行に必ず軍艦見学を行いました。これは昭和七年に西野先生が引卒された時の写真です。

西野辰五郎先生

忘れ得ぬ人たち（その三）

ここに書く人たちは、特に交友が深かったわけでもありませんが、それぞれ印象に残っておりますので、ふっと思いついたままに書きとどめてみました。

橋口景二さんと

長谷川光利さん

確か昭和六年だったと記憶しています。橋口景二という人が訪ねて来て、ざっと次のようなことを話しました。

自分は、二十四才の時に鹿児島から上京して来ましたが、五十円をふところに、さてこれから何をしようか……と、新橋の駅であれこれ考えましたが、結局本屋に入って本の行商をすることを決心しました。ところが、その時の五十円が、現在五百円になりましたので、この金をもって郷里に帰ろうか、それとも東京で仕事をしようか……と、もと来た新橋の駅でいろいろ

考えました。

そこでフツと思いついたのは、(本の行商をしている時、和裁の本はむずかしくてよくわからないが、大妻コタカ先生のかかれたものとても平易でわかりやすい)と、方々で聞かされたことでした。そうだここに目をつけてやれば何とかなる……と思って私は、その足ですぐ本屋へ帰って、同じ勤め先にいる長谷川光利という人と相談して、二人で資金を出しあって出版屋をやることにしました。こんな意味のことを話してゆかれたのです。

後日、今度は長谷川さんが来られて、橋口さんと二人で出版屋を始めたので、裁縫の本を書いてくれないか、とおっしゃるので、私は快く承諾し、「印税はいりませんから、それだけ安く売って下さい」といって、五円で売るはずのものを三円五十銭で五十万冊売りました。それによる喜びを感じたお二人から、ひきつづいて手芸や家事の本を書いてほしいと頼まれて書きましたが、いずれも三十万冊ずつ売れたということでした。

そんなある日、長谷川さんが、六つになる長男だという坊やをつれて、突然訪ねて来られて他の本屋で出版している大妻講義録を買いうけてこれも出版することにしましたし「大変もうけさせていたので、お礼にうけとって下さい」といって、千七百円の包みをもってみえましたが、私は、お金は要りませんから坊やのために貯金してあげて下さいといっってそのお金

をそっくり差上げた事がありました。

橋口さんは終戦後も、和裁、手芸、家事の本の紙型が焼けなかったので、それを再発行しようとして、新聞広告をされたところ、現金申込が非常に沢山あったので、大変感謝してください、後に私が追放になった時、私にお礼の気もちをふくめて家を建てて下さったのです。その後、橋口さんとおつきあいしても、長谷川さんとは全く音信がとだえておりました。

ところが一昨年、偶然、四谷の光文書院は長谷川さんがやっているらしい、ということを引きましたので、大変なつかしく思って電話をしてみましたら、うわさの通り長谷川さんだったのです。

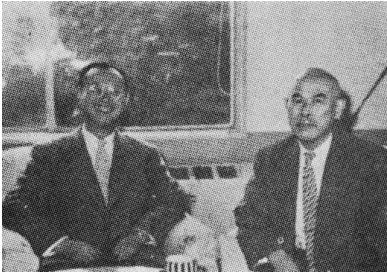
何十年ぶりのことですし、「さぞ、おぢいさんになられましたでしょう」といいましたら「どういたしまして、頭は真っ黒な青年ですよ」と仰言るので、大よろこびで逢いにゆきました。

今では、あの時の六つの坊やが立派に成



人されてお父さんの仕事を手伝っておられます。長谷川さんは、昔の思い出話をしながら、「あの時の中身は使ってしまいましたが、包紙だけは大事にしまっています」といつて見せて下さいました。

今は橋口さんも東京書院という大きな出版社を経営され、長谷川さんも立派な会社をもたれたのをこの目でみて大変うれしく思いました。お二人がこれからも、ますます大きくなられますようにと、心の中で願っています。



右が橋口景二氏
左が長谷川光利氏



田村 一郎さん

田村さんは明治三十三年、私が母校広島県の川尻小学校に始めて教鞭をとりました時、七才の可愛い小学生として、私の担任していた組に入学してきた生徒です。抜群の成績で、後、帝大（今の東大）の畜産科を卒えて三菱商事に入社し、満州移民の世話をするようになりました。昭和十二年東亜緬羊協会竜爪牧場の主任として三千頭の羊を飼育して活躍しており、丁度そのころ私は満州視察団長として多数の団員とともに渡満し、田村さんの牧場を訪ねましたが、あいにくと不在で会う



ことができず、大変に残念に思っておりますが、終戦後、ひよっこり私宅に訪ねてきて下さって、何十年ぶりの対面をして、昔話に花をさかせました。

田村さんは、昭和二十四年に引揚げて、現在は巣鴨にいますのだそうですが、満州の広野で陽にやけた顔で笑いながら話をしてるとやっぱり小学生だった頃の童顔が時々しのばれて当時を思い出してなつかしくなりました。

前頁の写真は、戦後田村さんが私宅に訪ねて来られた時のもの
上は満州当時の牧場

郷里の母校

昭和廿六年の暮、私の郷土である広島県の甲山町長兼広精一さんが上京されて「永年休校していた甲山の女学校を復活したいから御協力を願いたい」と申し込んで来られました。なつかしい郷里のこと、また母校でもありますので、喜んでお手伝いいたしますと返事をいたしました。すると翌廿七年の二月に再び見えられ、その女学校の校長になってくれとの話でした。しかし遠いところなので、年二、三回しか出席できませんが……と申しましたところ、それでも結構とのことでお引受けしました。

学校の名前は甲山町立高等技芸学校で校舎は町立中学校の一棟を借り、最初の生徒数はわずか三十七名でした。私の校長もほんの名儀ばかりなので誰か代理の責任者をと探しましたところ、たまたま当時、四国松山に赴任していた、卒業生の磯崎睦（むつみ）という人が、技芸の腕もあり、学校経営の才能もありと認めましたので、一年間の承諾を得て二人で甲山町の学校

へまいました。

尾道から八里の山間をバスにゆられて赴任した当時の磯崎さんの気持はどんなだったろうかと今でも話題になっています。町長さんたちは熱心でしたが、何分山間の小さな町なので、公立の中学校のように予算もとれず、その経営はそれこそなみ大抵ではありませんでしたから、私が行きますたびに磯崎さんは一年間の約束だから東京へ帰りたいとそればかりをいっていたものです。

その後、学校も順次発展して借物の校舎も狭いので独立校舎の建築に迫られました。

昭和三十三年の夏、私は参議院議員宮沢喜一氏にお願ひしまして、在京広島県出身の知名人の愛郷心に訴えて建築資金の寄付をお願ひに廻り、現総理の池田さんをはじめ大勢の方々のご協賛により、昭和三十三年の秋、新築校舎の落成を見ました。

ここまでにきましたのは教職員の方々の献身的な努力のお蔭ですし、私も母校が大きくなるのを見てうれしくなりません。

この学校がますます発展してゆきますことは本当におめでたい事です。その後郷土の町長はじめ町の人々の願ひによりまして、町立大妻女子専門学校と改名しました。ここにも又私の名前のつく学校が出来て、責任を感じて居ります。

二つの秘訣

註……松本市にて講演したものの概要

昔は五十、六十といえはすでに老齡の域にあって、七十七才の喜寿祝などということはめつたに耳にしたこともありませんでしたが、現代では生活様式も新しくなつたせい、昔のような猫背に杖というお年寄も少なくなつて来ましたし、食べ物も魚や肉類などの栄養豊富なもので油のつたお年寄が多く、ラジオやテレビで八十才のお年寄が歌謡曲を歌つて楽しむ……という新しい時代にかわつてしまいましたので、自然氣持も若くなつて五十、六十は働さざり……等と言われるようになりました。

ところで私も今年七十七才。元氣で気分もよろしく、いつも若い方々の中で、自分の年も忘れて楽しい生活を送っています。若さを保つためにはどんなことでもよいと思うことは一応実行してみるのがいつも快い笑いを忘れないことと、もう一つは常に何か一つの夢や目的をもつて、それに対する情熱を捨てないでいることではないでしょうか。いつもしかめっ面を

して、厭味ばかりいつていれば、自然顔にはしわが寄って若い人等は近寄ってはくれません。そうなれば、肉体的の衰えも一緒になって、食べることで、そしてお腹が一杯になれば寝ること、目がさめればおごとばかり……といった具合で、年寄りみてしましましょう。若い人達と共に笑い、共に考えていれば、いつの間にか気持の上での新陳代謝が盛んになり、年をとるのも忘れてしまいます。ですから若い人達の中で共に学び共に笑って良い意味での現代に密着した生活を送ることが若さのための一つの秘訣といえるのではないのでしょうか。

僻地で生れた私は魚や肉類に疎遠になりがちだったものですから、この年になっても牛乳など本当においしいと思ったことがないのです。「先生はまあ、そんな粗食でよく八十年近くも生きていらっしやる」と、親しい方にいわれる事もありますが、そんな時、私は長生の秘訣を披露いたします。

その一つは、焼いたモチを朝飯がわりに毎朝いただく「焼モチ食」です。素足で小学校に通っていた頃から、今日まで、これをつづけています。そのためでしょうか。モチのねばりが人生のねばりとなって長生の暗示を与えられる気がするのです。

然しいくら好物のおモチでも「灼熱下のモチは犬も喰わない」のたとえのあるように、真夏には、それこそただけませんか、梅雨頃から十月頃までは、一月末の大寒の頃に餅を小さ

く四角に切ってアラレにして陰干にしたものを煎って朝食に又は間食にしています。

体重十七貫、横がオーツマ、丈がコタカのおデブさんで、学校の仕事、表での仕事、教科書、参考書の書きかえなど今日ある命こそ冬は焼モチ、夏はアラレに負うところすこぶる大きいという訳です。人それぞれの秘訣もありませんが、私はこのように、ごく原始的な長寿の秘訣を守ったり、現代に密着した生活を送ることなどと妙に新しがたりしながら、七十七才の今日まで、無事に健康を守り通して来ました。

それでも、結婚後間もなく、たぶん二十七才だったと思いますが、急性肺炎をわずらったのが因で、七年間も肋膜炎を病んだことがありましたし、追放中には卵巣のう腫と乳腺炎で一年に二度も大手術を受け、入院生活をしたこともあります。

このように大きい病気にかかりましたが、それ等の病気もその時その時ですっかりなおってしまいましたし、今ではただ足が不自由なだけで、他は至って健康体です。旅行も大変好きですし、あつちこつち機会ある毎に出かけますのでかえって周りの人達が心配してくれませんが、もともと外出好きのために、家にばかりとじこもっていませんから、それが、健康のためにむしろ役立っているように思います。八十になっても九十になっても、いつまでも若い人に負けない明るさと健康を保ちたいものです。

喜寿におもう

今年で、七十七才の誕生を迎え、長い過去をふりかえって、よくも此処まで来たものだと思ながらおもいます。私が二十五才で塾を開いてから五十三年、夫の死後三十三年、決して短かい人生の歩みではなかったと思います。七十七年の足跡を顧りみますと、不思議にも、楽しかったこと、嬉しかったことよりも、悲しかったこと、つらかったことの方が、はるかに多くの脳裏に強く刻みつけられております。三才で父を亡くした私は父の顔さえ覚えなまま母の手一つで成長しました。「後家育ちと人に笑われまい」との母の躰けは、ともすれば男まさりの気性を私に植えつけてくれました。尋常小学校を卒業して、高等小学校への通学は、距離的事情で冬だけは下宿生活をしなければなりません。そのために週に一度の帰宅は勢一杯母に甘えられる無上楽しい時でした。こうした或る日、突然「母の病いが重い」という知らせを受けて、迎えの人と一緒に急いで帰宅して見れば母はもうつめたい軀（むくろ）と変っ

ておりました。私は、この時ようやく十四才。よくよく両親との縁の薄い子供でした。人の世の不幸せには色々ありましようが幼いものにとつてこれほどの悲しさがあるでしょうか。母に喜んで貰い度い、ほめて貰いたい、という気持が私の勉強への励みでもあり、楽しみでもありました。私はその時からたった一つの心の支えを失ってしまいました。然し兄や姉の励ましと愛情によって、再び希望への火が燃えはじめました。

それから数年、東京へのひたむきな祈りの実現まで、私の心にとゆみなくつづけられました。土地の小学校の代用教員という当時としては栄職であるべきこの仕事も、甲山技芸学校での手芸やお裁縫の勉強も、私の心をつなぐ絆にはなりません。長兄の許しを得て東京九段の和洋裁縫女学校に通うことになり、下谷（今日の台東区）御徒町の叔父の家に行きの紐をといったときの嬉しさは本当に今でも忘れることはできません。叔母の手伝いをしながら、毎日の通学の楽しさ。御徒町から九段坂上の学校への往復は勿論徒歩、毎朝「行って参ります」と玄関の敷居をまたげば私の心はもう前に行く人を一足抜こうという一杯でした。そして学校まで幾人かを次々と追い越して参りました。新しい朴歯の下駄は忽ち低くちび（すりへ）て行きます。雨天用には高い歯を、それが低くなれば晴天用に、いつも二足ずつ用意したこの履物は当時の私の大切な乗用車でした。学校での一年間は専ら、洋裁を習いました。授業

時間中は一筋でも多く縫うこと、一枚でも多く作ることが私の念願でした。なんでも覚えたい、習いたい、そしてそれを土台に新しい工夫をしたいと私のファイトは燃えつづけました。こうした私の学習欲が私の周囲に影響して、後年、大妻伝習所時代に三越の手芸展覧会へ、当時の一流校に伍してどうやら異彩を認められ、学校への昇格のチャンスを掴み得たのだと思っております。

結婚後も好きな道へ打ち込むことができましたのも、夫の理解と、周囲の温かいご援助の賜で、多少の迂余曲折はあったとしても、順調の成長を遂げておりました。大正十二年の関東大震災は一大衝撃でしたが、夫と共に努力しました。然し、昭和四年三月十七日急性肺炎で僅か五日間の病床で夫に急逝されましたことは私にとつて何にも例えようのない悲しさでした。大きな支柱を失って、私はただ茫然とするばかりでした。その日は高等女学校の入学試験の日で夕方から薄ら寒く白いものさえちらついて、三月には珍らしく地面は薄化粧さえ見せました。夫が不帰の客となったのは、その夜の七時二十四分でした。子供の無い私は一人ぼっち、ぼつねんと取り残されました。止めどない涙だけが頬をつたわりました。こんな気持はおそらく経験のない人には解って頂けないものだと思います。

然し私はやっぱり今のこの仕事と取り組んで行くべきだ、よし、全心全霊を打ち込んで行こ

うと覚悟をきめました。悲しみの間にも月日は流れて校運は上昇の一途をたどりました。これこそ、私の周囲の方々が寄せて下さいました誠意と理解のお蔭と感謝の言葉もありません。私はただ誠心誠意この仕事にはげんで少しでも皆様のお役に立たせて頂けたら霊界の夫への責任を果たすことができるのだと強く明るく生きることになりました。けれども喜寿までも健康で生きられようとは思いませんでした。

今日は本当に幸福と満足に浸りつくしている毎日です。終戦後の追放は一生を通じて最悪の時代でした。学校なくしては一日も過すことのできない私が学校から追われて住む家も無く、生活の支えのない苦境の五年間は何としても忘れることのできない淋しい歲月でした。それだけに解除されて再び学校にカムバックした喜びは筆舌に尽くされません。ことに卒業生の方達から「お母様は足が悪いから」と自動車を贈られた時、私は生きていてよかった、そして先生という仕事をしていて良かったとしみじみ身の幸せを感じました。

今は、唯一つ健康であり度い。八十迄も百までも、健康でこの道一筋に生き抜きたい。自分を凝視しながら今迄見残した新しい自分を見出して、少しでもより良い自分を作り上げて、少しでも多くの方々のお役に立たせて頂くために努力したいと希うばかりです。

ほめあいたい

同窓会誌「ふるさと」第十五号

(昭和三十六年)より

ある年、東京連合婦人会の新年のお集りに行き皆様にご挨拶をいたしました時に、吉岡弥生先生が、「大妻さんは美人とはいえないが笑い顔は実にいい——」とほめて下さいました。ほめていただいで私の気分は満更でもありませんし、その時の先生もまことにご気分がよさそうでした。「そうだ、これだ!! これだ!!」と私は膝を叩きました。というのは、私は毎年新しい年を迎えるたびに、何か一つだけ実行出来そうない事を見付けて、その線にそうように心掛ける習慣でしたので、今年は何を実行しようかと考えていた矢先だったからです。

さて、あの日の笑顔はどれだけよかったのか、あいにくききもらしましたが、だれでも渋い顔より笑い顔の方が数段よいことはきまっていますし、ましてあんなにほめて下さったのです

から、あの日の私は日頃は美人の上に大きな不の字のつく私でも大いに美人にみえたことだろうと自信をもちました。こうして、ほめられますと人情の常で、始終笑顔で暮したいと心掛けます。こんなちよつとしたことで、これだけの効果があるのですからほめるということ、ほめられるということは、美人製造の役目はたしてくれそうです。近ごろの方達は大分違つてきたようですが、昔風な方の中には、心で感心しても、ほめるのが妙にてれくさくて、口に出せないということが多いようです。思つた通りを、素直に自然にほめあうようになれたら、かどもたたずにどんなに素晴らしいことでしょう。それにしてもほめるということは、やさしそうで存外むずかしいし、むずかしそうで案外やさしいことです。

ほめるという事は、お世辞とは違います。昔から巧言令色と書いておべんちやらとふりがなをつけた程、お世辞はいましめられていることです。ほめるということは、素直な感情ですが、お世辞には作爲的な感情が入りますから、言うほうも、言われたほうも案外いやな気分を味わうものです。「いいことだ」と思つたり「きれいだ」と感じた時にそれが素直に言葉になつて出た場合は、さわやかな気分を味わうものです……。ほめられて、むかつ腹をたてて、一日不愉快だったなどという人はいませんし、ほんのさりげない言葉一つで、その日一日が明るくも暗くもなるものだとすれば、ほめ合うことは生きた宝石ともいえます。

ラテン系の人達は一般に陽気で自己表現のためには顔の表情、手足を総動員して百万言を費すのもいとわれない性格があるとききますが、それだけに感情の表現がはつきりして、お互いにこの上ない上機嫌な時もあるけれど、喧嘩、口論もしばしばだそうで、その結果として不愉快な陰気さでふさぐ、やりきれなさにも悩んでいるそうです。そこでこの対策として、ミラノでは、悪口辞典とでもなづけられるものが発行されたということです。不愉快な思いをした時には、その鬱憤を抱いたままわが家に帰って、この辞典をひらいて読んでみるとたちどころにすばらしい名文句にぶつかって、明日はこれを相手に、ピシヤリと叩きつけようと考えてから一晩ねると、「鉄は熱いうちにうて」の諺通り、時間が頭を冷静にして、いまさら昨日の不愉快のむしかえしをしたくないというのが常で、せっかく覚えこんだ悪口への仕返しも実行に及ばないでおさまってしまう、つまりこの辞典が一つの安全弁になるということです。

何処の国でもお互いの生活を愉しくありたいと念じている努力を、面白く感じました。あいにくとまだ日本には、こんな重宝な辞典はないようですから、私達は悪口をいいあう不愉快なやりとりをまず除外して、お互にお互の一日をさわやかに愉しみながら、生活してゆきたいも



のです。

皆さんも、皆さんのご家族の方々も、「ほめ合ってゆこう」ということを心掛けていただけたら、今年はず年よりも、もっと嬉しい、佳年になることと思います。私と一緒に、これを
実行なさって下さいませんか――。

よい妻に

註……北海道にて講演の概要

最近の新聞を見ますと、社会悪から生れるいろいろの家庭悲劇があまりにも多く、私共の眼を蔽うものがあります。まして個々の家庭に入りますと、思いがけない処に、様々の問題があつて、他目には幸せに見えながらも実際には悩みを持つている人達が随分あるようです。

昔と違って世の中が複雑なだけに、家庭生活にも大きく影響しているためでしょうが、ともかく生きてゆく以上はいつも家庭第一でありたいと私は希望しております。

少数の異例はあるとしても、大方の人は結婚して家庭を営み、その家庭を中心として幸福な生活を造り上げ度いと願うものです。結婚当時はその理想に向かって歩いてるように見えますが日がたつにつれて、「よい主婦」であり「よい母」にはなれても、いつかよい妻であることを忘れているのがつきます。子供を育てることや、一家の生計の切り盛りに懸命のあまりともすれば妻の役目をなおざりにしがちです。職業などを持つている主婦の場合は尚さら

強く感じられます。こんな時に家庭の問題は頭をもたげて来るのです。

家庭は妻の独占場でもなく夫の独占場でもなく、夫婦二人の共同の場であり、子供もまた同様です。家庭生活にあつてはその中心はいつの場合でも夫婦二人であつて、ここに問題や不平があつてはよい家庭造りは望めません。家庭に入つては一生を通じて「よい妻」であることを心がけて頂き度いと希つております。その上によい主婦であり、よい母であることです。人間として女性の生活も段々各方面にその範囲を拡げられて来ましたが、結婚生活に入った上は、まず家庭第一主義、こうして円満な家庭をつくつてから、それぞれの能力に応じて各方面への進出を第二義的に考えて頂きたいものです。

この道三十年

註……昭和二十九年一月、NHKから「明るい茶の間」の時間に放送したもの

お昼休みなどに、学校の運動場で、生徒達が、ヒザ小僧を出して、ところ狭しと馳け廻りながら「ボール」「ストライク」等と歓声をあげて、のびのびとゲームを楽しんでいる様子を眺めますと、時代の変遷をしみじみと感じます。ほんとうに早いものでございまして、私が塾を開きましてから、もう四十五年になります。今更のように、年月の過ぎる事の早さに驚いて、感慨無量な思いが致します。あの頃は——と、老人の昔語りを申し上げますと、これでも当時としては随分ハイカラなほうで、女書生のスタイルよろしく希望に胸をふくらませながら、往來を闊歩していた自分の姿が、走馬燈のように思い出されます。もともと私は数学が好きで、出来る事なら、数学の教師になりたいと志した程でしたが、周囲から反対されまして、女は嫁にゆくべきだから、まあ家庭的にという意味で、裁縫を習うようにすすめられました。否応なしに最初の意志とは、およそかけはなれた道を進むようになりました。そのうちに、御近所の

二、三のお嬢さん方のお相手に、手芸やら、お裁縫の手ほどきをしましたのが始まりで、あと、あと、これが自分の一生の仕事になろうとは、考えてもいなかった事でした。

学生当時の写真を持ち出して眺めるとボンネットを被った、今で言う、アフタヌーンを着こなして、まるで、その頃の宮中服を思わせるような恰好で、すましこんでいる自分の姿に、思わずフキ出してしまいますが、これは数学を志した私が、お裁縫のしかも洋裁学校に入りまして、その卒業式に、自分でデザインをした自慢のスタイルだったのでございます。私は美人の上に大きな「不」の字をつけながらも、若さの強みとは申しながら、最新式の様子で収まっている、天晴れな度胸のよさに、われながら驚いてしまいます。

こうして、清水きよみづの舞台からとび降りる覚悟で洋裁を習いましたのに、残念なことには、この当時は洋服が実用的でないと言う、今考えますと、まるで逆のようなお話ですが、とにかく、そんな理由から私は、また和裁の学校で勉強をする事になりました。ここでは、今迄のボンネットやアフタヌーンとも別れて、桃割れに結び、花かんざしをさし、それに縞の着物に現在なら七分コートと間違えられそうな長い羽織を、ゾロリと着込んで、ほうばの下駄を二足用意して、歯のちびれたのをお天気用、ちびれていないのを雨降り用にして歩いたものですが、暫くして、羽織袴に靴をはくと言った、和洋折衷の恰好に変わりました。勿論、日本髪は束髪に変

り、そしてその日その日の気分で色とりどりのリボンをかけたものだと、その頃を思い出しておりますと、時の流れが、服装に大きな影響を与えています事に気がつきます。近頃の人には、洋服の生活が主体で若い方々の和服は特別な場合の服装になつていくようにみえますが、着物姿のお嬢さんを街でみうけますと、何かホットして嬉しい気がいたします。和服の美しさは、日本のよさを象徴していますし、何時の場合でも、外国に行かれる婦人方が和服を用意なさるのは、この和服のもつ伝統のなごやかさを認識されているためなのでしょう。結局、和服は儀礼的な時や、いこいのための服装に変わりましたが、考えてみますと、五十年前のお洒落で洋服を着た頃とは、全く対照的に逆になりました。

こうしてみますと、時代の変化は、後になり先になり、繰り返されてゆきますが、どんな場合でも新しいものと、古いものとの、よいところだけをとり上げれば、それはそれで立派だと思えます。また服装は着る人の気持にもいろいろな感情を起こさせます。そこでエチケットが問題となる訳ですが、最近では男女共学で、女の子が乱暴になったとかお行儀が悪いとかいわれます。なるほど戦前の女大生（おんなだいがく）的なものの見方からいえば、そうした事も一つ一つ気に入らない事ですが、生活の舞台が変わっています以上、あまり神経質にとりあげないで、むしろ嫌味のない明るさを延ばして行ったらよいのではないかと思います。動揺

の激しい現在、多少のゆきすぎはあるでしょうが、右に走りすぎたり、左に走りすぎたりしているうちに、自分から、自然に愛情と信頼のよせられるエチケットを、あみ出してくれると思いますので、若い人達にその道標として、私は形式よりも自分の心を素直に表現するようにと話しております。

私の今日を築いてくれましたのは、有言実行型と申しますか、言ったことは必ず実行するという主義で、責任を持ち、人の嫌がる仕事はまず自分でやり、その中から人間学を学び取るという事を、モットーとしておりました。そして日常のほんの一寸した小さな事でさえも、その一つ一つに立派な意義が有る事をさとりまして、毎日活字になっていない修養書を読ませていただいて来ました。口でこそ一口に四十五年と申しますが、半世紀に近いこの間に、お目にかかった方々から、生きた本の勉強をさせていただいた事は、なんといつても感謝にたえませ

ん。
私達は何時まで、井の中のカワズであってはならないと思えます。が、そうかと言って、外国崇拜のあまり、これのみに縋るのでも困ります。ひと頃のような、外からいろいろな物あれもこれもと、受取るばかりではなくて、それをじっくり消化する時間もほしいものです。そして、日本的なよい面を、逆に世界に発表して貰い度いと、私は若い人達に期待しております。

す。今の学生は、もう一かどの成人ですし、理想家であり、理窟屋であり、反逆者でもありませんから、私はよき話相手になると共に、聞き手にもなり、またよい友達になろうと努めております。

私が塾を開いた当時の十一人たらずのグループから、今日五千人に余る学生を擁する学校に発展する迄、さぞかし、大変な苦勞だったろうと人様が言っただけですが、私はこれといってとりあげて申上げるような苦勞は致しておりません。教育という道に傾けてまいりました私の愛情や、苦勞等は、小さな力であつて、むしろ不自由な事も苦しい事も乗り越えて現在に至るまで、ご援助下さった方々があればこそとしみじみ思います。昨年は四十五周年を記念して感謝祭を催しましたが、この日は、私の七十年間の生活で最も感銘深く最大のよろこびと、感謝の日でもございました。途中、五年間のパージで、心寂しい生活を致しましたが、このパージは、日曜日も休まない忙しさで私的な生活のゆとりを持たなかつた私に、少しは休むようにと天から与えられたお恵みであつたかも知れません。幸に、私はまだ壮健で、足の不自由さだけが辛い日々でしたが、そのために、卒業生達から先年「愛の贈物」として自動車をいただきました。何時までも、私を師として親しみ懐しんでくれる愛情を深く感じ、足の不自由なのがかえつて、師弟をつなぐ絆になつたと喜んでおります。



私の足の不自由なのをみかねて、卒業生達から贈られたルノー。自動車をもったのは初めてでもあり、これに乗れば何処にでもゆけると思いますがその嬉しかった事！

その後、ルノーがシボレーに替り、現在ではトヨベット・クラウンに替りましたが私はこの可愛らしい車を頂いた時の喜びは未だに忘れられず、時にこの写真を出しては、私のよき友達として街を走ってくれた日の事を思い出します。

外地の思い出

私は足が不自由なだけで、あとは健康ですから、年に何回か旅行しますし、出かける事が好きなだけに、その都度思い出の多い土地のあれこれが脳裏から離れません。けれどもその中でも特に親しい人達と旅行した朝鮮、満州、台湾、樺太は忘れられないものがあります。今でもあの時のことを思い出すと、もう一度あの平和な気分が味えるようになってきたら、ぜひ出かけてみたいとしみじみ思います。

朝 鮮

昭和八年五月九日、十日の朝鮮京城の帝国大学講堂で、全国高等女学校長会議が開催され、十七日まで満州視察というスケジュールで、結局五月三日から二十三日までの二十日間を外地で過ごしました。

ここでその時の日程や模様の主なものを記憶をたどってみることにしますと下関を出発したのは、五月三日の午後十時半でした。午後十時半といえばむろん夜行です。先生方が「校長先生ノ 西野先生ノ 藤井先生ノ 岩佐先生ノ」と、互いに呼び合う声に声が重なって言葉も聞きとれない程でボーイさん達は必死でこの大乗客を綱を張って整理していましたが、遂に私達四人は互に姿を見失ってしまいました。

各人の荷物が重い上にこの大混雑で、廊下もデツキも満員ですからまるで貨物船のように、押しこめらるだけ押しこめられて身動きもとれず、荷物の整理も出来ません。これが二等船室の盛況ですから他は推して知るべしです。でも私たち女性は、かろうじて、また一緒になれて、二等婦人室の一室を占めることが出来ました。一名につき、枕一つと座布団一枚ずつで、その



上人と人がびったりくっついているので、船内のあつちこつちから不満の声が勃発しますし、ボーイさんも始末が出来ず、遂には船員総動員で整理にかかりましたが、もう客も黙ってはいませんし、どうにもいたしかたがありません。終に「已むを得ません。不満のお方は下船せられたい」と船員の方からいわれる始末です。でも、今更下船する人もなく、結局みんなでゴロゴロしての泣寝入りに終ってしまいました。

乗船前から「朝鮮海峡は荒れますから要心なさい」といろいろの御注意をいただいていたのに、乗船の騒ぎがかえって幸して、海の荒れる心配などはすっかり忘れて、畳の上で寝ている時と少しも変わらず、唯々快い疲れにぐっすりやすみました。

海峡の夜も過ぎて、東の空も白々として来たころ、朝鮮半島の山が、うすく見え始めました。初夏とはいえ風は冷たく



内地の風とはちがった気分でした。始めて踏む外地に心をは
ずませて釜山に上陸しました。さすがに釜山の姿は堂々とし
て、始めて見る我々旅行者の目を大いにそそるものがありま
した。海は深く、波は静かで、その上、港の設備も完備して
いて大変立派なおどろきでした。

いよいよ内地教育者団一行三百余名が行列で引率されて、
棧橋接続のホテルに案内され朝食を済ませましたが、いざ上
陸してみると、内地と朝鮮とはいくらかもへだたっていない
い、極めて近くにあるという感じでした。

釜山では簡単な市内見物をし、その足ですぐに大邱へ向かい
ました。大邱にはなつかしい卒業生たちが出迎えていてくれ
ましたが、一足も立ち止ってお話し出来ない忙しきで、汽車を
捨て、自動車に乗るまで、数分歩きながらの面談というあわ
ただしきでした。大邱からは三十一台の自動車に分乗し、慶
州に向けてドライブしましたが、文字通りの黄塵万丈、ペー



金剛山に登った折の写真で、どの方も、
勇しい姿なのが、今見るとおかしいや
ら、懐しいやらの気持が交々です。

ルなしには到底呼吸も出来ない有様
です。その日は新羅王陵王碑の遺物
を巡覧して仏国寺に一泊しました。

翌朝は五時半にホテルを出発し
て、一里の山上にある石窟庵の視察
に行きました。激しい坂道なので自
力でのぼるには一苦勞なことです。
いくらかお金を出せば朝鮮人の腰押
しがついてくれますので、私は半ば
面白半分にあのんでみました。朝鮮
人に五十銭を払い「どうも御苦労さ
ま」といいますと、「チョンマネー
ヨ」（どういたしまして）との返事
でした。私が朝鮮で覚えて来た唯一
つの言葉です。

以後八日まで、金剛山、神溪寺、九竜淵方面、京城市内の博物館や学校などの方々を見学して、いよいよ九日に京城帝大で開かれた校長会議に出席しました。

この日の会議は全国の校長さんたちで会場もあふれんばかりの盛況です。その中で、係員が一通の電報をもつて入って来て、しきりに、「オオツマゴタカ先生」と読みあげていましたが、該当者がいないらしく誰も受けとりにゆきませんでした。廊下にはこういう受取人のわからない郵便物をたくさん掲示したところがありました。休けい時間に奈良育英高女の藤井先生が、その中から引きぬいた一通の電報を手にして、私の肩を叩いて「これは確かにあなたのですヨ」と笑いながらおっしゃるのです。手にとってみますと、オオツマゴタカというのを、帝大の事務所で立派に「大津孫高」と漢字に直してしまったのでした。発信人も私の留守宅からでみんな大いに笑ったものでした。そのことがどうして知れたか雑誌「キング」に笑い話として出たのです。その年、私が台湾に行きましたとき、悪天候で船室で退屈しておりますと、ボーイさんが、アンマさんでも呼びましょうか、といいますので、呼んでもらいましたら、目あきのあるさんが、私の室の入口迄来て、「ああ大津孫高さんのお部屋ですね……」というのです。私はびつくりして、どうしてオオツマゴタカを御存知なのですかとたずねますと、「今日キングで読んだばかりです」ということで、おどろきました。それをきっかけに、昔から知っ

ていた人と話しているかのように親しみを感じ、暫らく退屈をまぎらすことが出来ました。

満 州

京城も校長会議を最後に、十日午後六時過ぎに臨時列車でいよいよ満州に向け出発し明の光が見えそめる頃、新義州を通過して、直ちに鴨緑江を渡る車中では経度の関係で一時間時計を遅らせました。

十一日午前七時、満洲国への第一歩として安東に着きました。一日のうちに安東、奉天の見学と、依然としてスケジュールに追われるばかりで、多勢のお出迎えをして下さった方々に挨拶もそこそこの忙しさです。

満洲での思い出といえば、ここは大変スリの多い国で、同行の藤井先生は行きずりの子供に手さげをとられてしまいました。あっと思った時にはすでに姿も見えない程の敏捷さです。持物には随分気を使っている積りでも、とんでもない所で実にすばやくやられるのですからたまりません。私も手さげの上においた旅行の日程表をとられて大いに憤慨、旅行の間中大変不便を感じたのを憶えています。それ以来満洲には実に巧みなスリがいるということを知り、私たち一行は、それこそ「人を見たら泥棒と思え」の心掛で、用心に用心を重ねました。



爾靈山にて

右から

西野主事

大妻コタカ

藤井先生

私の前にいるのは卒業生

それから撫順についた時、ある卒業生が面会に来てくれましたので、私もはまず口を揃えて満洲での被害を報告しました。するとその卒業生曰く「本当に満洲ではスリに特に特にお気をつけて下さい。私も自宅で掃除をしていた途中で窓を開けたまま、お手洗いにきました。部屋に戻ってみますと、驚いたことに、テーブルの上に置いてあったテーブルセンターがないのです。ほんの一刻二分という間ですの……」。翌朝泥棒市場に行ってみましたら、何とそれを、堂々と定価をつけて売りに出しているのです。自分の物を買って帰るなんておかしな話ですが、お金を出して買って来ました。」と話していました。全く笑い話のような話ですが、あまりにもなさけない事ですね。実際その頃の満洲はそんな国だったので。

新京では新市街城内を一巡りした後、南嶺新戦場を見学しました。所々に戦死者の標石があります。多くの勇士にせめてもの香を手向け英霊を弔いました。

吉林では市街を通って北山城関帝廟に着きましたが、その山麓で、かつて張学良の政権下で発行された紙幣を焼捨てている現場を見たりしました。附近には立派な邸宅別荘寺院等が、支那独自の趣巧をこらし丹青の色も鮮かに塗られています。この地方にも泥棒が非常に多いと聞いて街の裕福そうな印象からみると全く不思議に感じられる程です。その他、ハルピン、大連、旅順など立止る暇もないままいそがしいながらも見学を済ませることが出来ました。

台 湾

朝鮮、満洲の視察旅行を終えてその年（昭和八年）も、またコンクリートを焼きつくしそうな土用の暑さの中で、学校での夏期講習を例年の通り七月二十五日から始めました。先生も生徒も指導に習得に汗みどろの八月一日、私は女高師で開催中の女教員大会に出席して、安東先生方と昼食を共にしました。するとその時、安東先生から、御夫妻で台湾にお発ちの事を伺い、何とかして一緒に行かないかと、しきりにお誘い下さいました。かつて六月頃でしたか、そのお話は伺ったことはありませんが、あいにく講習の期間にあたりますので、行きたいのは山々ながら断念していました。然し「今日ご出発」と聞き、なお何とかして一緒にとお誘いいただいて急に心が動き、さっそく留守中のことを他の先生方をお願いして台湾行きを決定しました。

安東先生方は、一日に東京をお発ちになり神戸港から船で下関に出られる御予定でしたが、私は準備のため一日遅れ、二日午後一時東京発の特急で下関へ直行し、翌三日に、下関で先生方の一行に加わりました。



屏東の蕃屋の前にて 右後のかやぶきが蕃屋，蕃人はいくら暑くても裸足のままで今着ているのは晴着とのことでした。

今日が今日まで、台湾を見たいという永年の希望を断念してしまっただけに、いよいよ台湾にゆくことが決まってみるとそのうれしさは格別でした。しかも、真夏の台湾を旅行して、熱帯の夏の気分を充分味わい得て、台湾におられる内地人のご苦心もよくお察しすることが出来たのですから、この旅は私の想像以上の収穫でした。

台湾での日程は僅か十六日間でしたが、二週間あまりの見学とは思われない位、いろいろと珍しいこと、面白いこと、うれしい事に遭遇しました。その数々のうちから特に興味をひかれたことや失敗談など思い出しながら二、三書いてみたいと思います。

台湾では、台北見物を皮切りに方々見学したのですが、まず台北に泊まった時のことから笑い話

を一つ……。

私たち一行は教育会館に泊りました。そこはまだ新築したばかりで、完全に仕上がった所といえは玄関、風呂場位なもので後はまだ作っている最中でした。そんな訳で建物自体も大変ぶつそうな上に暑さも倍して窓を締め切つて寝る訳にもまいりませんし、みんなで、満洲の盗難事件を思い出しながらそれぞれ荷物を抱いて休むことになりました。暑さと荷物の心配とでおちおち熟睡も出来ません。翌朝みんな赤く目を腫らして座っていましたら、阿部視学が面会に来られ、「ゆうべは良く寝られなかった」と事情を話しましたら、視学は大いに笑つて「それはどうも失礼しました。先にいっておけばよかったです。御承知の通り、台湾は海あり、山あり、野ありであらゆる物資に大変恵まれていますので、何を苦しんで夜中にココソコ人の物をとりに入るでしょう。台湾に限り決してそんな御心配はいりません」といわれました。我々は大いに安心し、それ以来、台湾は満洲とちがいはんとに気楽な旅が出来ました。

また、台北では蕃界としてよく知られている角板山（かっぱんざん）にのぼりました。朝早く出て一日中台車に乗つて山坂越えて山頂に登るのですが、私たちは一台の車に二人ずつ乗り、それをパンツ一枚の蕃人が汗水たらしながら押しつたり引つぱつたりしてくれました。ただでさえ暑い台湾が、おまけに土用ですからいくらかものなれた人達とはいいいながら、さぞかし大変な苦

しきだらうと同情しないではいられませんでした。昼ごろ中腹に着き、ウーロン茶(紅茶)の製造会社を見学した後、見わたす限りの茶の原を眺めながら用意された昼食をいただきました。

頂上については午後三時半頃でしたが、平野と異なり山頂はいくらか涼しかったようです。始めに蕃人教育所の授業を參觀したのですが、何よりも蕃人の頭のよいのに感心しました。私たち五人の客の名前を一度で全部覚えてしまいますし、算数の問題でも暗算ですばやく回答します。蕃童たちといろいろ話をしたり唱歌をきいたり、彼等自身の手によって着々と進められている建築基礎工事、農作、また師への敬慕の涙ぐましい様子を眼の前にもて、大変感激いたしました。次いで物品交易所へ行き、民芸品などの記念の買物をしてその夜の宿泊所に指定された薫風楼へ落ちつきました。そこは角板山でも一番上等な旅館で宮様も御利用なさることでした。

その夜山上で、内地から興行のお芝居があるということでしたので、そういう多勢の人達が集まる所では何か面白い民族性も見られるだろうと思つて、安東先生方と提灯をともして芝居を見に行きました。芝居小屋のそばでは裸に近い裸足の蕃人が何か喋りながら右往左往しています。中では安かつらをかぶつた芝居が行なわれているのを、私たちは提灯をもって窓ごしに見て帰りました。成人した蕃人の女性はみんな一様に口の両わきにひげの様に刺青をしているとい



台湾の阿里山にて

八月とはいえ阿里山の頂上はとても寒く、みんな冬物を着ております。

後はいくかかえもあるような一本の神木で、こんな大きな木を何本も何本も伐採していました。

うことを発見しました。ところが六十才位の女の人で、ただ一人だけ刺青をしていないのを見ました。そのことを宿に帰って話したら、薫風楼の楼主がいうに「蕃人というのは大変な野蛮で下卑た人間のように思われますが、意外に貞操観念の非常に堅固な民族です。女性の刺青は貞操の象徴で、たとえ一度でも過失を犯したらもはや結婚することも出来ませんし、青刺を入れることも出来ません。刺青は結婚した女の人が入れます。あの女は若い頃に性の要求をしたとか、そのために、あの女は大変に淫猥だという悪評がたち、今だに相手にする人が居ないので

す。」と、言葉少なに、いかに貞操が尊ばれているかを語ってくれました。

蕃人とはいえ私たちの想像も及ばないきびしさにつくづく感嘆したことでした。

台南に付いたのは何日目だったかはつきりおぼえていませんが、とにかく暑さのきびしい日でした。宿の女主人に迎えられて旅館に行きましたが、台湾の人のていねいな扱いには恐縮しました。朝昼夜の三回主人が必ず各部屋をまわり「何か御用がございましたら御遠慮なくお申しつけ下さい」と挨拶し、女中さんの手のゆきとどいていることも、まれに見るサービズぶりで、その丁寧さには恐縮しました。

互いに知らない行きずりの人にも朝夕の挨拶をかならずお互いに交して御気嫌を伺いますし、性格は大変正直で争いもなく、つくづく台湾はよいところだ……と感じました。

唯一つ困ったことは、台湾中どこへ行っても天井に沢山の「やもり」がいて、キューツ、キューツと気味悪い声でなっているのです。そして蚊帳カヤの上に落ちて来て、慣れない私なぞドキッとすることがしばしばでした。このことだけはいやだと思いましたが、あとは大変いい所なのです。

私たちはあちこちで講演をしながら旅行を続けたのですが、どこの講演会場でも、偉い方々が一緒に、台湾という所は大変に虚栄の激しい所ですから無意味な虚栄心を捨ててることを強調し



台湾にてタロコに行く　タロコは自動車の行かない山の中なので、蕃人が二本の竹の棒に籐で出来たかごをしぼりつけて人をのせ前後をかついでくれます。乗っているのは私

て欲しいとたのまれるのです。台湾の虚栄心だけは私たち内地の者には想像も及ばないものだということを多くの人々から聞かされました。

最後にカレンコウに行きました。三里の山路を、蕃人のかつぐかごに乗って、登って行きま
す。一口にかごといっても、いわゆる日本の昔
のかごのように屋根やすだれで外の景色が見ら
れない様なものではなく、三尺四方位の四角な台
の上に低い手すりがついただけで、眺めよくき
くように作られています。私一人のために五
人の蕃人がつき、四人が交代でかごをかつぎ、
一人は食料品を運ぶ役目です。先頭にはお巡り
さんがわらじがけでたち、最後に説明役の地理
の人がついて下さいます。

こうして私たち五人のカレンコウ行きは、三

十人の行列になって、大名行列のようで、お巡りさんは一里毎に駐在所で交代しますので、その都度一同はかごからおりてお茶をいただきました。その道すがら驚いたことは、道の掃除が大変ゆきとどいていることです。どこまで行ってもゴミ一つなく、帚の跡も消えない程のきれいさです。大変感心しましたので、カレンコウの道はどうしてこんなにきれいなのですかとたづねてみました。するとお巡りさんは、「道の掃除は当番が決まっています、当番の人は朝まだ暗い中に家を出て、Aさんは甲地点を出発して、乙まで行き帚ではいたり草をとったりしながら甲地点へ帰って来ます。同じ頃乙からBさんが丙まで行って掃除をしながら帰って来るようにいくつかの区切ってお互にその区間を、責任をもって掃除しているのです」と説明して下さいました。このように公衆道徳はおどろく程行きとどいていました。

全旅行日程の中、普通の旅館に泊まったのはたった二日で、ほかは凡ゆる面を視察させてやろうという視学のお心づかいで医者の家、商人の家、教育者の家、或は一般の家庭……と、色々な家に泊めて下さいましたので、二十日間の旅行とは思えない程、多くの経験をして帰ることが出来ました。

樺 太

台湾を旅行して、日本人の住む最南端の地をみましたので、今度は北の端に行きたいと望んでおりましたら、丁度翌九年の夏に樺太庁と東京女子高師内の児童教育研究会とが聯合して樺太の豊原で夏季大学が開催されることになりました。これを機会に、本校から安東先生御夫妻その他十文字先生、大立目きく先生に私と五人は、幸い団体に加えていただくことが出来ました。

東京を八月二日に発ちましたが、途中北海道の見物などで手間取ってしまいましたので、樺太についたのは七日の午後六時半頃でした。駅前の花屋ホテルに宿をとり、早速入浴を済ませて夕食の食卓につきました。樺太は今苺の出盛りとかで食卓はにぎわい、一同大よろこびで、それからは食事毎に苺を出して貰うようにと頼んだものでした。台湾の時もそうでしたが宿の感じがとてもよいのです。湯殿の立派なのはまた格別でした。女中さん達も大変に親切で気持ちよく、いつまでも落ちついていたくなるような所でした。

然し八日からは講習も始まりますので、いつまでも同じ所に居座る訳にもまいりませんし、



樺太とソビエトの国境 国境は、松や杉のような大木はなく雑木ばかりで二間位の道がついているだけです。中央の碑は国境の石で日本側には十六枚の菊のご紋、ソビエト側にはワシをほってあります。後の三人は国境を守っている人たち。

さつそく計画をたて、暇をみてはあつちこつちの見学に忙しい日を過ごすことになりました。

十八日から北行して海豹島、国境地方の見学旅行をすることになり、午前七時十五分発の汽車で一行百四十人は北に向う途中、樺太独特の森林の様子やお花畑等のめずらしい風景を眺めました。知取町（しるとりちょう）に着いたのは午後四時ごろ……百人以上の観光客が下車したのは町始まつて以来というので一同大歓迎をうけましたが、私たち五人はいつも講師格の待遇をうけて、ここでも特別の室に通され、夕食も町から

赤飯が出た上に、合の子弁当までもたせていただきました。

その夜、海豹島に渡るべく船に乗りましたが、船室も特別で、ゆったりくつろぐことが出来ましたので、一般会員のすし詰とは大ちがいで、他の方たちには何だかお気の毒でした。

午前三時ごろから日の出を拝もうと、時々頭をあげてみましたが、霧が濃くて海上の景色など全く見えず、すでに海豹島の近くに来ていながら島に船を寄せることも出来ません。この調子ではオットセイの生活をみるのも断念しなければならぬかと心配していましたがだんだん霧も晴れて、島も髭髯と姿を見せ八時頃からハシケに移り上陸することが出来ました。この島は周囲がたった一五〇〇メートル余りの小さな島ですが、島の周囲の砂場はオットセイの繁殖場、島の上はペンギン鳥の繁殖場として世界に名高い所です。

オットセイは、毎年五月の中旬から十一月始めまでこの島に居て、その他の期間は南方の海中に居るとのことでした。砂原には一匹のおすのオットセイが何十ものめすをつれて一群になっているのが、いくつも、いくつもあって一大偉観を呈しています。しかしおすが年をとるにはがってめすがそばに寄りつかなくなりしますので、ウオー、ウオーと怪しげな声を呼び寄せていますが、雌も近寄ろうといたしません。そんな雄のオットセイのことを老大獣（ロウタイジユウ）といっていますが、海豹島見学以来、私たち五人は、一行の最年長者なので、



山のように見える背景は、実はペンギンで、一夫一婦ずつきれいに整列して、とても見事でした。

八月とはいえ大変寒く私たちはみんな白い大きなショールで体をつつんできます。

向って右より安東テイ先生、

二番目が大妻コタカ

いつも老犬扱いにされて、混んだ車中などでも、老犬に席をゆずってあげましょう等とかかわれながら大変愉快な旅を続けました。

八月とはいえ、島の気温は大変低く東京の三月位でセーターなど着なければたえられない位寒さがひしひしと迫って来ますので、この興味深い見学もそれ以上長居出来ませんでした。

午前十一時過、オットセイや鷗や鶴等の群がる一大怪画郷を後に、樺太最北の都会敷香の町をめざして間宮丸で出航しました。朝霧のために見えなかった島も昼過ぎになるとはつきり見え、山の上に白いお腹を前にして何段にも一列に並んだペンギンの列が私たちの目をひきました。ペンギンは、砂原の一夫多妻的なオットセイとは反対に二羽ずつきちんと並んでいるのがいかにも対照的で面白いと思えました。雄と雌が交代に海へ餌物をとりに行くのだそうです。

オットセイやペンギンの話に打ち興じているうちにいつの間にか、海豹島もかすみの中にかくれてしまい、午後六時半ごろ、無事敷香にたどりつきました。この土地は、ツンドラ地帯に砂を三尺ほど置いた町とかで、足が砂の中に埋まって非常に歩きにくいのです。それでもヨタヨタ歩きながらその夜の宿、秋田屋につきました。

翌朝六時に宿を出発して、バスに乗り国境に向いました。敷香の町から国境まで約十キロという沿道は、殆んどがすすくすくと生い茂った松並木で大変に見事なものでした。所々が火事の

ために無惨な姿を残していました。火事とはいえ、消す人もなく、燃えるところまで燃えてゆき、自然に消えてしまうまで放っておくというのが普通なのだそうです。所々に数軒位の部落もありましたが、いかにも国境に近いという感じがいたしました。

正午頃国境に着きました。

国境では、鉄砲をもった守備の巡查さんに案内されました。国境といっても平らな雑木の山中に三間巾位の真直な道がありそのところどころに境があるだけで、この境は石標や木標で区切られいづれもその標の日本側は菊の御紋章、ロシア側は鷲の紋章が附いております。あまりに多勢の見学団だったからでしょうか、ロシア側からも鉄砲をもった二人の番兵が出て来ました。異様な緊張感につつまれながら、国境を守る人の責任を考えさせられるのでした。

翌十三日には、オスタの森に行きました。当時そこには数種の土人が住み、皆原始そのままの生活を営んでおります。ギリヤーク、オロツコ、サンダー、ヤクート等の種族が居りますがこれらの中でも特に興味深いヤクート人の家を見学しました。言葉はオスタの森にある教育所に来て三年位で話せるようになることでした。

「我々ヤクート人は世界に二十万人でここでは私の一家只三人であります。国籍もないのですが、日章旗の許に毎日を心安く生活しております。一步露国に足をふみこめば忽ちに銃殺され

ます」ということを二十才位の娘さんが通訳で、日本語まじりで語ってくれました。多少の日本語も書けるとかで、たのまれたサインをしたり大変忙しそうでした。

そろそろ樺太の旅行も終りを告げる八月十四日。快晴の敷香町を後に、自動車で新聞に向かいました。海岸の波打際を走りながら、前の車が真白い波の中をかけ抜ける時、私たちも車窓に波を浴びながら走るのは、実に壮快でした。約二週間の滞在だった樺太を後に豊原に向かいましたが、帰りの海上は行きよりも一層おだやかで、旅の平穩を祝福してくれたかのようにでした。

今考えてみても、朝鮮、満洲、台湾、樺太などの日程も毎日、ぎっしりつめられたスケジュールなのに、それが苦にもならず、強行軍に加われたというのは、やっぱり若かったからでもありますし、足が不自由でなかったという好条件もあるでしょうが、それにもまして、愉快な旅行だったから、元気がでたのだと思います。

世界教育会議

昭和十二年八月世界教育大会が日本で開かれ、世界各国の学者が各自専門の立場から研究発表をいたしました。その際日本の女子手工芸教育界を代表して私が永年の研究と将来への希望をこめて、帝国大学（東京大学）の会場で発表いたしました。この発表は私の話を本校手工芸科担当の河野とみさんが通訳され、同時にこの部会出席の各国代表には、和、英、両文のパンフレットが渡されました。

その時の発表内容の概要を左に書いてみます。

日本女子中等学校及び専門学校に於ける手工芸教育について

一、女子手工芸教育の意義

日本に於て女子が関与した手工芸教育は二つの形態に分けることが出来る。

一つは広義の見地に立つ場合で、主として家庭手工芸と見るべき衣服の裁縫、服飾品の製作に必要な技能、及び住生活に附随する手工芸で、これらは家庭で要求されるばかりでなく、生産的職業分野の教育をも含む。この意味に於て、社会教育的な意義をもっている。

一方狭義には所謂学校教育としての裁縫・手芸であつて、明治五年（一八七二年）文部省の学制発布以後に於ける学校の教科形態として表わされている。

今ここで発表する「日本女子中等学校及び専門学校に於ける手工芸教育」は学校教育を主体とし、それに関連した女子手工芸の一般教育分野に論及したいと思う。

二、女子中等学校及び専門学校に於ける手工芸教育の発達

元来日本の伝統的思想では、女子は専ら家庭にあつて家庭内の家務一切を処理することを本分とし、その養育に力を注がれていた。従つて学校教育以前に於いては、専ら母の手によつて裁縫・手芸その他の教養をつまされることが多かった。十七世紀の後半に寺子屋式の集団教育が始まり、明治五年、東京女子学校が開校されるに及んで他の学科と共に裁縫、手芸も学校に委ねられ、逐次隆盛となつたが、明治二十八年文部省は高等女学校の裁縫を必須科として手芸を

随意科とされ、同四十四年には全く省かれ、僅かに実科高等女学校に於て形だけを止めることとなり、手工芸教育は衰えるようになった。

その後実務教育の必要は再び叫ばれて、高等女学校、実科高等女学校はもとより、専門教育をも要望するようになって、専門部、又専門の学校も次第にその数を増すことになった。

三、手工芸教育に関する思潮

手工芸教育を思想の発達上から眺めると、初めて女学校が設立された時代は全く実用上の見地からで、其後学校が一般陶冶の面と実務の面とに分れた時代には勤労を軽んずる我国古來からの弊風から、とかく軽視されるところとなった。然し近年さかんに反省をうながされているが、技術に関する指導者は、実技習熟を重んじ、工夫創作の力をはばむことが多く、教育的な研究は僅かにその緒についた程度である。

四、女子手工芸教育の実際について

現在の手工芸教育は、学科の上から見ると、裁縫、刺繍、編物、染色、造花、及び作業科として簡易な木金工が最近課せられている。授業時数は高女で裁縫は四く六時間、手芸一く二時

間。専門学校では裁縫（和・洋十五時間前後）、手芸は八〜九時間である。

五、結論

家庭手工芸が家庭を離れ、社会の生産工業に移り、学校教育は一般陶冶と、職業との関係の問題とするようになった。又学校は修業年限の関係上簡易であつて、陶冶価値の多いものを教材として択んで自ら工夫、創作の能力發揮に重点をおき、日本伝統の美術として、又高い教養の一つとして誇りをもっている。

思い出を繰る

古いアルバムをひもといてみますと、過去七十年という長い人生行路の数々の出来ごとがしのばれて、感慨無量なものがあります。

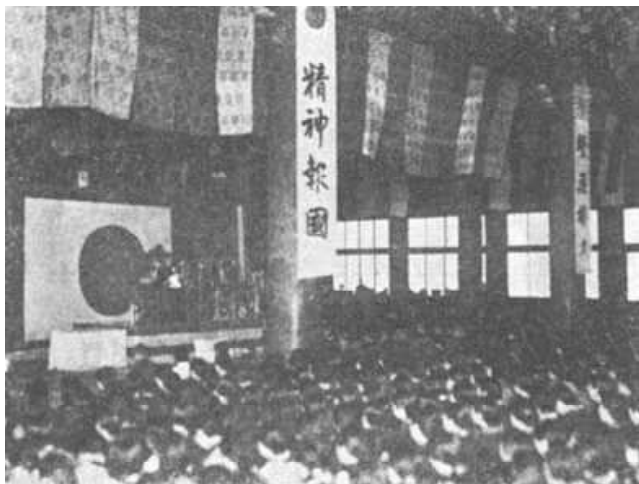
うれしかったこと、かなしかったこと、たのしかったこと……：一枚一枚の写真の中にはどれひとつとして思い出のないものはなく、何冊も積み重ねられたアルバムを開いてはいつまでも閉じることを忘れて見入っています。ここに、それらの中から特に思い出深いもの或いは記ろくとして残したいものを数枚より出して集めてみました。

決して写真としていいものではありませんが、これらの写真と、私の歩んだ足跡をみくらべながら御覧下さって、少しでも私を身近に感じて下さればうれしいと思います。



昭和4年5月

良馬、コタカと並んでかかっていた表札も、この日を最後として、私一人だけの表札になりました。夫の表札をとった跡が、板塀の色も白くかたのままに残っているのが無性に冷たく感じられました。



私は戦時中京都西本願寺の依頼で昭和十七年の夏「たんすの底から世の中へ」「百億死蔵を生かせ」というテーマをかかげて全国を講演して歩きました。

どこの会場でも、会場いっぱいにも勢の人たちが集まり、真剣に聞き、質問され、張りあいのある講演でした。五十日間という長い期間を、激しいスケジュールにもくじげず張りきって、同じ題目のもとにまわりえたのも思えば、勝ちぬきたい一心だったからです。



昭和三年頃、当時毎年三回ずつ開かれていた東京都の女子校長会の集いにおいて撮影。

このうち現在ご存命の方は、向って右端の三輪田繁子先生と、左端の私の二人だけ。

向って右端 三輪田繁子先生

前列そのとなり吉岡弥生先生

堀越千代子先生

鳩山春子先生

嘉悦たか子先生

後列の向って左端

大妻コタカ



昭和4年10月30日 教育勅語御下賜満40年記念において、二重橋前で、東京私立高等女学校組合を代表して、陛下に奉答文を奏上しました。

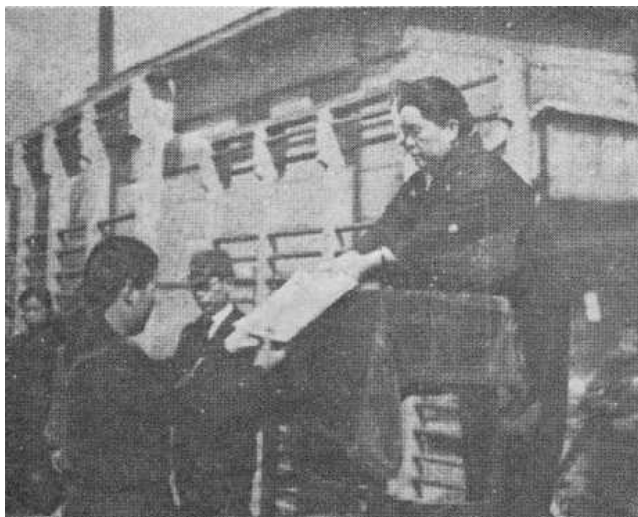
この年の3月17日に夫に死別して暗い淋しい生活をしていた時でしたから、推薦された時は大変感激しまして、当日までの1週間程毎日清水で身体を清めて当日に備えた忘れ得ない思い出です。



横が大ツマ，縦がコタカ，美人の上に大きく不の字がつく私でも，やはり女ごころがあつてか，たまには丸まげも結ってみたくて，時にふれてはおめかししてたのしんでいました。

翌日は教壇に立たなければなりませんので，朝結った髪も，晩には解いてしまうというあわただしさ…それでも，私は丸まげを結うことで，ひとしお情緒を味わっていたものです。

昭和2年，義兄小森重長の末女フク子と共に



昭和二十年三月十日、戦災のために校舎が全焼して、二十八日には運動場の焼け残ったロクボクの前で卒業式をしました。戦時中で、布の節約のため袖丈も四十七センチと限定され、下はこの通りのモンペ姿。これも大変思い出深い写真です。



広島県世羅郡甲山の高等小学校時代の同級生ばかりでとったもの、私が郷里を訪れると、万難を排して集まって下さり、みんなで昔を語り、現在を語りながら共によろこびあつてたのしい一日を過します。



藤田茂氏は元陸軍中將で、北満で活躍していましたが戦後捕虜として中共へ連行されておりました。昭和三十三年、めでたく十八年間という長い捕虜としての生活に終止符をうって釈放されました。

私は甥をはじめ、若い友だちや、知人もこの戦争では随分なくしました。それだけに、藤田さんが帰還されたことはうれしいことでした。これは、その年三月東京駅につかれた時のよろこびの写真です。向って右から

藤田 茂氏

三沢豊子さん(藤田氏の実妹)

大妻コタカ



昭和三十五年十月二十八日、招かれた桐丘学園創立六十周年の式典後、桐生市産業文化会館で二千名の聴衆を前に「くもくめし」の題でいろいろ具体的な引例を含めて女性の人格向上についての講演をこころみました。

この学校と私との関係は昔一人の老婦人（桐丘学園の校長）が学校に見え、令息のためこの学校の卒業生をぜひお嫁さんにほしいと申込まれたので、毎年大妻で開かれる展覧会に当の息子さんにきてもらいました。

その時選ばれたのが現在ここの学園長夫人です。

ごもくめし 〈非売品〉

著者 大妻コタカ

発行所 大妻学院

昭和三十六年十一月三日 初版

昭和五十四年三月十七日 改訂

〈用字・用語の一部を改訂〉

電子復刻版

ごもくめし 〈非売品〉

著 者 大妻コタカ

発行所 大妻学院

平成二十九年五月一日 発行

このページは本復刻にあたり、新たに加えたものです。